

上 九 反 遺 跡

—稲里中央土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1997. 3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化と共に「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接大地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など、文化の始源をも内包する基準資料であり、埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考えるうえでの実証者といえましょう。

このたび、長野市稲里中央土地区画整理事業に伴い、上九反遺跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺ではこれまでに埋蔵文化財の包蔵が希薄な地域と考えられておりましたが、今回の発掘調査で新たな埋蔵文化財包蔵地の発見に至り、地域史の再考に重要な知見を提供したものと考えられます。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第85集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました稲里中央土地区画整理組合をはじめ、関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成9年3月

長野市教育委員会 教育長 滝澤 忠男

例 言

- 1 本書は、「稲里中央土地区画整理事業」に伴い実施した、長野市稲里町字上九反、川中島町字中氷鉤 ほか
に所在する「上九反遺跡」（長野市遺跡台帳番号H-008）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長野市稲里中央土地区画整理組合理事長と長野市長との間に締結された埋蔵文化財発掘調査委託受
託契約に基づき、長野市教育委員会が担当し、長野市埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査は、平成6年度・7年度に現地調査を、平成8年度に整理作業を実施した。
- 4 調査面積は1,432㎡である。なお、年次別内訳は本文中に記した。
- 5 現地調査は矢口忠良の指導の下、平成6年度調査を風間栄一、笠井敦子が、また、平成7年度調査は千野浩、
清水武、堀内健次、藤田隆之があたった。調査参加者については、本文中に示した。
- 6 遺構実測図は（株）写真測図研究所が開発したコーディックシステムを援用するため同社に委託し、1/20
の縮尺で基本図を作成した。本書掲載図は1/80で統一している。ただし、個別詳細図等はこの限りではなく、
適宜縮尺を明示している。
- 7 出土遺物は、基本的に1/4以上残存している個体を実測し、縮尺1/4で統一し、掲載している。
なお、出土した土器の断面は基本的に土師器を白抜き、須恵器を塗りつぶしている。また、黒色処理は網掛
けで表現している。
- 9 本書作成に係る各作業は調査員が分担して行った。なお、遺物の実測については、調査員に加え中殿章子が
あたった。
- 10 各図の浄書は、全体図を西沢真弓、遺構図を青木善子、遺物実測図を風間が行った。
- 11 現地における遺構写真は各年次の調査員が、出土遺物は風間が撮影した。
- 12 遺構番号は調査年次ごとに付されているため、一貫した通し番号となっていない。さらに、注記を調査時の
番号にて実施したため、遺構番号の整理はかえって混乱の原因となるため実施しなかった。なお、重複した遺
構番号があるため、地区名を関して遺構番号とする。
- 13 本書の執筆ならびに編集は、矢口の指導の下、調査担当者の協力を得て、風間が行った。
- 14 調査で得られた資料は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）が保管している。

目 次

序

例 言

I 調査経過	1
1 調査に至る経過	
2 発掘調査の経過	
3 調査体制	
II 上九反遺跡の位置	3
III 調査概要	
1 平成5年度確認調査の概要	4
2 平成6年度発掘調査の概要	6
3 平成7年度発掘調査の概要	8
IV 調査結果	
1 古墳時代	11
2 奈良時代	30
3 平安時代	36
4 鉄製品・石製品・土製品	43
V まとめ	
1 古墳時代後期土器群の理解	45
2 C区9号住居出土土鈴について	46
3 集落の展開と周辺遺跡との相関関係	47

挿 図 目 次

第1図 位置図(1:25,000)	3	第12図 A区SB3出土土器実測図(1:4)	12
第2図 確認調査試掘坑位置概念図	4	第13図 A区SB4位置図(1:80)	13
第3図 調査地点位置図	4	第14図 A区SB5実測図(1:80)	14
第4図 遺構分布図(1:100)	5	第15図 A区SB5出土土器実測図(1:4)	14
第5図 A・B地区検出面出土土器実測図(1:4)	6	第16図 A区SB7実測図(1:80)	16
第6図 平成6年度調査地点遺構分布図(1:200)	7	第17図 A区SB7出土土器実測図(1:4)	17
第7図 C区検出面出土土器実測図(1:4)	8	第18図 A区SB7遺物出土状況図(1:40)	18
第8図 平成7年度調査地点遺構分布図(1:200)	9~10	第19図 C区SB1実測図(1:80)	19
第9図 A区SB1実測図(1:80)	11	第20図 C区SB1出土土器実測図(1:4)	19
第10図 A区SB1出土土器実測図(1:4)	11	第21図 C区SB10実測図(1:80)	20
第11図 A区SB3実測図(1:80)	12	第22図 C区SB10出土土器実測図(1:4)	20
		第23図 C区SB6実測図(1:80)	21
		第24図 C区SB6出土土器実測図①(1:4)	21
		第25図 C区SB6出土土器実測図②(1:4)	22

第26図	C区SB7実測図(1:80) ……23	第45図	C区SK14出土土器実測図(1:4) ……34
第27図	C区SB7出土土器実測図(1:4) ……23	第46図	C区SD4出土土器実測図(1:4) ……35
第28図	C区SB9実測図(1:80) ……25	第47図	C区SD4実測図(1:150) ……35
第29図	C区SB9出土土器実測図(1:4) ……25	第48図	C区SD7実測図(1:150) ……35
第30図	C区SB11実測図(1:80) ……26	第49図	C区SD7出土土器実測図(1:4) ……35
第31図	C区SB11出土土器実測図(1:4) ……26	第50図	A区SB2出土土器実測図(1:4) ……36
第32図	C区SB12実測図(1:80) ……27	第51図	B区SB11実測図(1:80) ……36
第33図	C区SB12出土土器実測図(1:4) ……28	第52図	B区SB11出土土器実測図(1:4) ……37
第34図	C区SD1実測図(1:80) ……29	第53図	C区SD11実測図(1:200) ……37
第35図	C区SD9実測図(1:80) ……29	第54図	C区SD3・11出土土器実測図(1:4) ……………37
第36図	C区SD1・9出土土器実測図(1:4) ……………29	第55図	C区SD3実測図(1:200) ……38
第37図	C区SB3実測図(1:80) ……30	第56図	C区SD2出土土器実測図(1:4) ……38
第38図	C区SB3出土土器実測図(1:4) ……31	第57図	鉄製品実測図(1:3) ……43
第39図	C区SB4実測図(1:80) ……32	第58図	石製品実測図(1:2および1:3) ……43
第40図	C区SB4出土土器実測図(1:4) ……32	第59図	土製品実測図(1:2および1:3) ……44
第41図	C区SB5実測図(1:80) ……32	第60図	塚原5号墳出土馬鐸実測図(1:4) ……47
第42図	C区SK10実測図(1:80) ……33		
第43図	C区SK10出土土器実測図(1:4) ……33		
第44図	C区SK14実測図(1:80) ……33		

挿表目次

第1表	平成6年度調査区遺構一覽表 ……6
第2表	平成7年度調査区遺構一覽表 ……8
第3表	A区SB1出土土器觀察表 ……11
第4表	A区SB3出土土器觀察表 ……13
第5表	A区SB5出土土器觀察表 ……15
第6表	A区SB7出土土器觀察表 ……16
第7表	C区SB1・10出土土器觀察表…20
第8表	C区SB6出土土器觀察表 ……22
第9表	C区SB7出土土器觀察表 ……24
第10表	C区SB9出土土器觀察表 ……25
第11表	C区SB11出土土器觀察表 ……26
第12表	C区SB12出土土器觀察表 ……28
第13表	C区SD1・9出土土器觀察表…29
第14表	C区SB3出土土器觀察表 ……30
第15表	C区SK10・14出土土器觀察表…34
第16表	C区SD4・7出土土器觀察表…35
第17表	A区SB2出土土器觀察表 ……36
第18表	B区SB11出土土器觀察表 ……36
第19表	C区SD3・11出土土器觀察表…38

写真目次

写真1	調査風景 ……6	写真16	C区SB3 ……31
写真2	B区全景 ……6	写真17	C区SK10 ……33
写真3	調査風景 ……8	写真18	C区SK14 ……33
写真4	A区SB2 ……11	写真19	墨書拡大 ……36
写真5	A区SB3・4…13	写真20	C区SD2 ……38
写真6	A区SB5 ……15	写真21	出土土器① ……39
写真7	A区SB7完掘状 況 ……15	写真22	出土土器② ……40
写真8	A区SB7遺物出 土状況 ……18	写真23	出土土器③ ……41
写真9	C区SB6 ……22	写真24	出土土器④ ……42
写真10	C区SB6遺物出 土状況 ……22	写真25	C区SB9出土土 鈴 ……44
写真11	C区SB7全景…24		
写真12	C区SB7完掘状 況 ……24		
写真13	土鈴 ……25		
写真14	C区SB11 ……27		
写真15	C区SB12 ……28		

I 調査経過

1 調査に至る経過

本書報告の上九反遺跡が位置する稲里町田牧、川中島町中氷鉋は近年、宅地開発が進み、一大住宅地となって大きく変貌をとげている。また、長野オリンピック開催に伴って国道19号線長野南バイパスが当該地を横断するかたちで新規着工されることとなり、土地区画整理事業が本格化する運びとなった。

事業予定地は、これまでに埋蔵文化財の包蔵こそ知られてはいなかったものの、平成4年度に調査を実施した田牧居帰遺跡の近接地であるため事前調査の必要性を認め、長野市稲里中央土地区画整理組合と協議を実施した。協議結果に基づき、組合理事長の依頼を受けて平成5年3月29日・30日の2日間にわたり確認調査を実施した。事業予定地内の任意の地点30ヶ所を選定し、このうち、予定地南端部試掘坑において埋蔵文化財の包蔵を確認した。また、予定地東側においても部分的に包蔵の可能性を認め、発掘調査ならびにさらなる詳細分布調査の実施が必要となった。

本体工事計画に基づき協議を重ねた結果、現地発掘調査を平成6年度・7年度に発注部分のうち埋蔵文化財包蔵地域をそれぞれ対象に行い、平成8年度に整理作業を実施することとなった。

なお、本遺跡は当事業に伴い新たに発見され、包蔵を確認した試掘坑が位置する小字名をとって「上九反（かみくたん）遺跡」を呼称することとした。長野市遺跡台帳番号は「H-008」である。

2 発掘調査の経過

発掘調査は本体工事の発注に合わせ、平成6年度に工事車両の進入口となる主要幹線部分を、また、平成7年度はその他の残りの部分を対象として実施した。

平成6年度は、南北に併行する幹線部分を調査対象地とし、東側をA区、西側をB区と呼称した。平成7年1月9日に調査に着手し、A区より順次調査を実施した。前述したように、当遺跡は新発見遺跡のため、遺跡範囲がつかめておらず、確認調査によって包蔵が確認された地点付近から、北側ならびに東側へと包含層を迫りかけて、表土掘削作業を実施した。この結果、北側においては当初の予測どおりであったが、東側は遺跡範囲が広がることがわかり、包含層の途切れる部分まで調査区を拡張することとなった。調査実施期間が冬季であったため、降雪によって作業を中断せざるを得ない日が続いたが、検出遺構数は予想を下回り、2月9日にすべての作業を終了し、撤収した。実質稼働日数は14日である。

平成7年度は、平成6年度調査実施地点の南側部分（C区）を対象として、10月11日に着手した。平成6年度調査のB区の西側併行部より表土掘削を実施したが、包含層の存在は認められず、試掘坑を設定して包蔵状況の確認に努め、遺構の存在が確認された部分について10月13日より調査に着手した。調査は西から東へと順次進め、12月19日に現地におけるすべての作業を終了し、撤収した。実質稼働日数は39日である。

平成8年度は、4月15日より調査記録（図面・写真等）および出土遺物の整理作業に着手した。各作業を順次すすめ、本書刊行に至っている。なお、年次別調査面積は以下のとおりである。

平成6年度	調査対象地点	A・B区	調査面積	400㎡
平成7年度	調査対象地点	C区	調査面積	1,032㎡
平成8年度	整理作業			
合 計			調査総面積	1,432㎡

3 調査体制

発掘調査は長野市長と長野市稲里中央土地区画整理組合理事長との委託受託契約に基づき、長野市教育委員会の受託事業として、長野市埋蔵文化財センターが担当、実施した。

調査体制は以下のとおりである。

調査委託者	長野市稲里中央土地区画整理組合	理事長	大野 栄（6年度） 塩野入福栄（7・8年度）
調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝澤忠男
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所 長	荒井和雄（6年度） 丸田修三（7・8年度）
		主 幹	鈴木貞夫（6年度）
	庶務係	所長補佐	山中武徳（6年度） 小林重夫（7・8年度）
		事務職員	青木厚子
	調査係	所長補佐	矢口忠良
		主 査	青木和明 専門員 山田美弥子
		主 査	千野 浩 専門員 寺島孝典（6・7年度）
		主 事	飯島哲也 専門員 西沢真弓
		主 事	風間栄一 専門員 小野由美子
		主 事	小林和子 専門員 堀内健次（7・8年度）
		専門主事	太田重成（6年度） 専門員 藤田隆之（7・8年度）
		専門主事	清水 武 専門員 勝田智紀（8年度）
		専門員	中殿章子 専門員 小林まゆ佳（8年度）
		専門員	笠井敦子（6年度） 専門員 宮川明美（8年度）

調査員 青木善子（8年度）

発掘調査参加者 青木ウメ 青木志げ子 赤尾のり子 大田米子 大屋和代 大屋辰子 大屋洋子
北澤みのり 小林智恵子 塚田 栄 塚田春子 富田弥子 馬場静江 馬場秀子
馬場信一 馬場文子 馬場季子 馬場富美子 松坂あい子 松坂美与子 松橋茂子
松橋永子 山口朝子 若林修子 若林登与子 若林洋子

整理作業参加者 倉島敬子 塚田容子 徳成奈於子 西尾千枝 向山純子 松澤ナオエ

遺構測量委託 株式会社写真測図研究所 代表取締役 杉本幸治

重機掘削業務 松代建設工業株式会社 代表取締役 湯本正衛（平成6年度）

北信土建株式会社 代表取締役 野澤柳一郎（平成7年度）

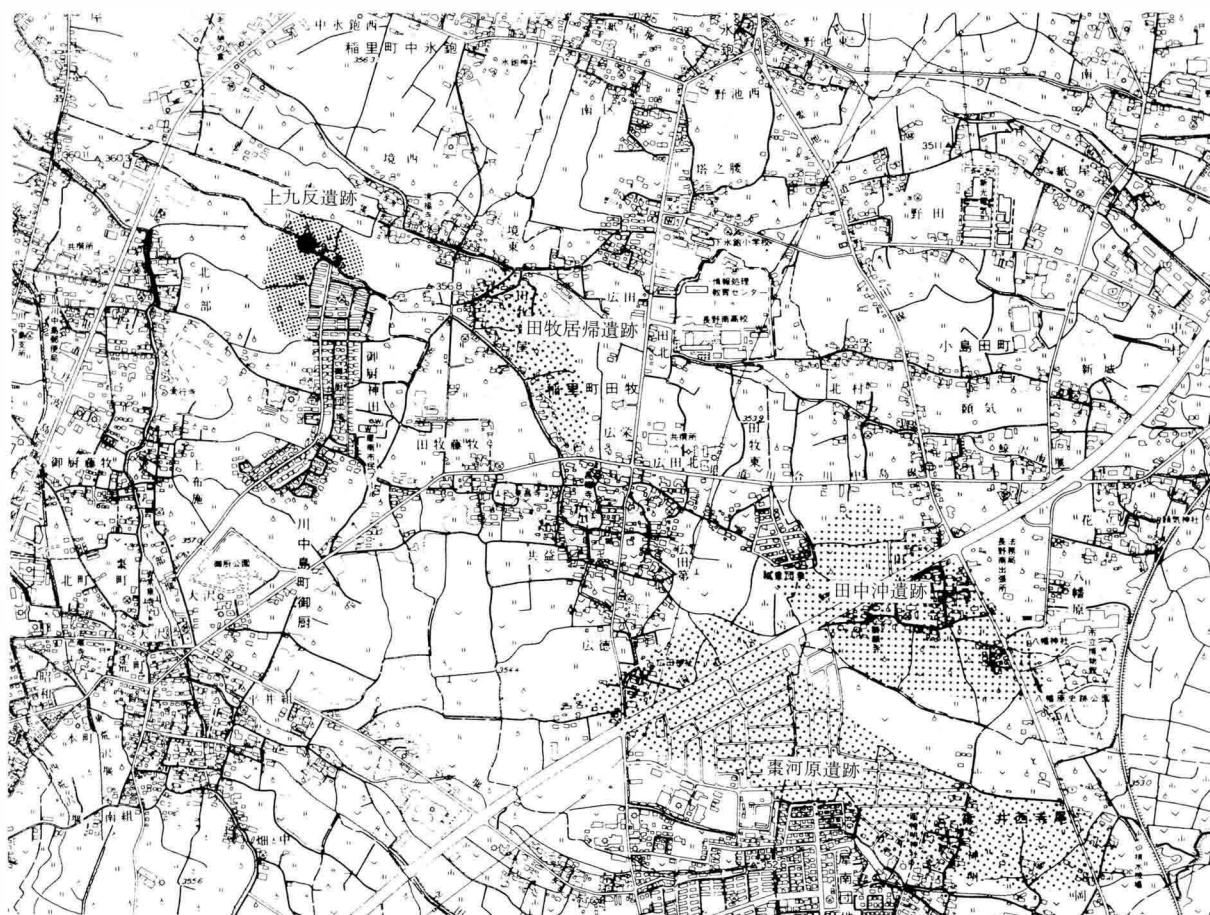
調査の実施にあたって、稲里中央土地区画整理組合には、多大なご理解とご協力を得た。特に、作業員募集については組合に一任し、非常に多くの方の参加を得ることができた。また、工事請負業者である、松代建設工業株式会社ならびに北信土建株式会社には、調査の進捗状況に応じて、工事工程の柔軟な対応をしていただいた。現地作業に関わった作業員ほか、関係各位の協力があったことを明記し、感謝申し上げる。

II 上九反遺跡の位置

北アルプスに水源を発する犀川は山地地形にV字谷を刻みながら東流し、犀口に至って一気に善光寺平へと流れ込む。上九反遺跡が立地する川中島扇状地は、この一気に開放された強力な河川堆積作用によって形成された巨大な扇状地地形である。犀口より盆地内へと流れ込んだ犀川は幾筋にも別れ、東側にて北流する千曲川へと流れ落ちる。川中島の地名が示すとおり、まさにこの扇状地は東に千曲川を控え、犀川が乱流する地形であったのであろう。当調査によっても広範な河川堆積の痕跡が確認でき、乱流する河川との共存を果たした古代人の足跡をみることができる。

川中島扇状地における遺跡の分布状況は、古墳時代が主となる田中沖遺跡、平安時代が主となる棗河原遺跡、同じく平安期の密集する集落、南宮遺跡と扇端部に主として認められる。この三遺跡ともに遺構密集度が非常に高い集落域である点に共通項をみることができる。現在その所在が千曲川河川敷である散布地、花立遺跡を除くと、明確に遺跡の形成が確認できるのは、田中沖遺跡における古墳時代中期である。集落形成が活発になるのは古墳時代後期と平安時代であり、その二時期に密集した集落域が形成されている。

一方、上九反遺跡は扇中央部に選地しており、前記した遺跡群とは立地を異にする。平成4年に発掘調査が実施された田牧居帰遺跡によって遺跡の存在が明確となった地域である。田牧居帰遺跡は平安時代集落域で、瓦塔片や陶硯等の出土より、集落の性格が注目されている。今回、調査報告する上九反遺跡も古墳時代後期と平安時代に形成された集落域であり、扇状地内において人的活動の痕跡が追える時期に合致している。

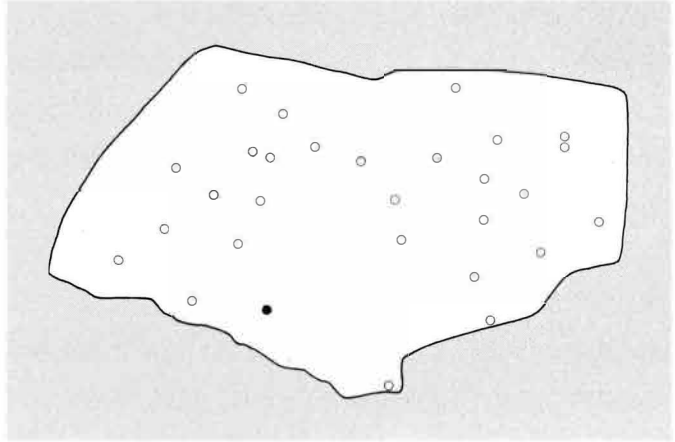


第1図 位置図 (1 : 25,000)

Ⅲ 調査概要

1 平成5年度確認調査（試掘）の概要

平成5年3月29・30日に実施した確認調査（試掘）は、事業予定地全域を対象とし、掘削の条件にみあう任意の30地点を選定し、試掘坑掘削を実施した。試掘坑壁面における土層観察によると、第26地点（図中●地点）においてのみ、包含層の存在ならびに土器小片の出土がみられ、埋蔵文化財包蔵が確認された。これより北側にあたる第1～第22地点は強粘土層や砂（礫）層を主体とした土層堆積が観察され、埋蔵文化財包蔵の可能性は希薄と判断された。また、東側の第23～25地点、西側の第27・28地点においても包含層の存在は確



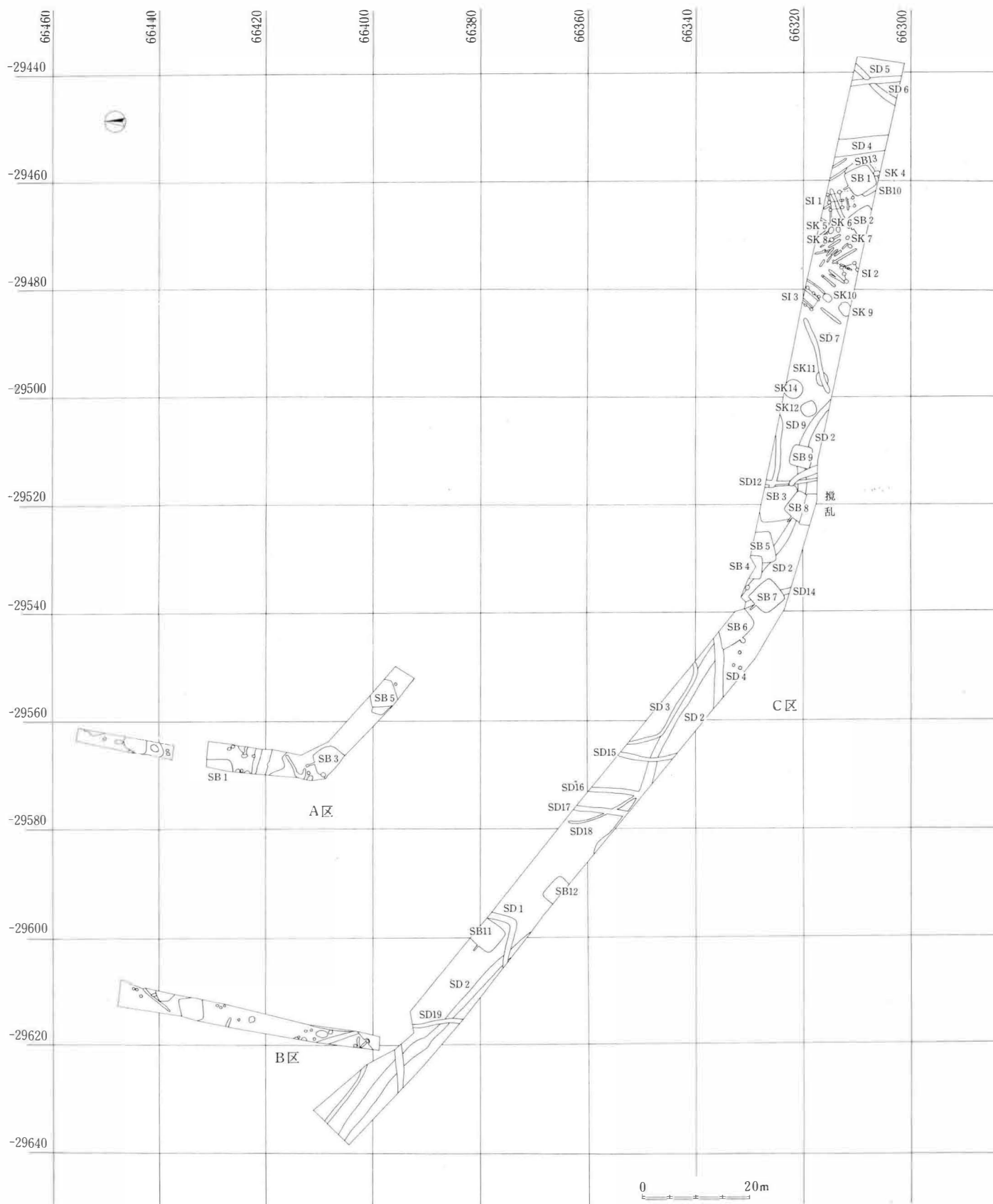
第2図 確認調査試掘坑位置概念図

認されず、包蔵が確認された第26地点から南側にかけての狭い範囲に包蔵の可能性が高いとの所見を得た。

いずれの試掘坑においても現地地表下100～130cmで砂礫を主体とする基盤層を、さらに上部に強粘土層や砂層等、直接的な河川の堆積作用による土層を確認したが、包含層の存在を確認した第26地点付近においてのみ、こうした土層の堆積は明確でない。この堆積土層の相違は現地地形観察による微高地地形が完全でないにせよ、古代に遡る可能性を示唆するとみられ、旧犀川流路に面した微高地上に集落遺跡が展開する可能性が把握された。



第3図 調査地点位置図



第4图 遺構分布图 (1:100)

2 平成6年度発掘調査の概要

平成6年度は、A区、B区の二地区で、竪穴住居13軒、土坑4基、溝10条、ピット群の調査を実施した。

古墳時代後期竪穴住居7軒はすべて主軸を北西方向に向け、確認できたカマドもすべて北西に位置している。重複関係も認められず、極めて散在的なあり方を示している。住居構造に関しては、いずれの住居においても柱穴の存在が極めて不明瞭な点があげられる。また、床面も全体的に脆弱である。

平安時代の遺構としては、竪穴住居2軒、溝3条が検出されたにすぎない。しかしながら、当調査区内で唯一重複関係を有するA区のSB6（平安時代）とSB7（古墳時代）では、後世のSB6の掘り込みがSB7床面まで達していない。また、遺構が存在しない空白期間が認められることから、古墳時代後期以降に活発な土壌堆積があったものと考えられ、耕作等の影響によって失われた遺構が存在したものと考えられる。検出面出土遺物として図示した灰釉陶器の存在もそれを裏付けるものとできよう。

さて、A区SB8ならびにB区SB9以北では、表土直下に砂礫層が存在し、また、包含層が途切れることを確認した。砂礫層は川原石を主体としており、比較的厚く堆積する。犀川旧流路の一部とみられ、これより北側には遺構の展開はなく、北限と捉えられる。また、A区SB5以东においても、包含層の途切れが認められ、地形変換として東限の一端をしめすものと判断できる。



第5図 A・B地区検出面出土土器実測図(1:4)



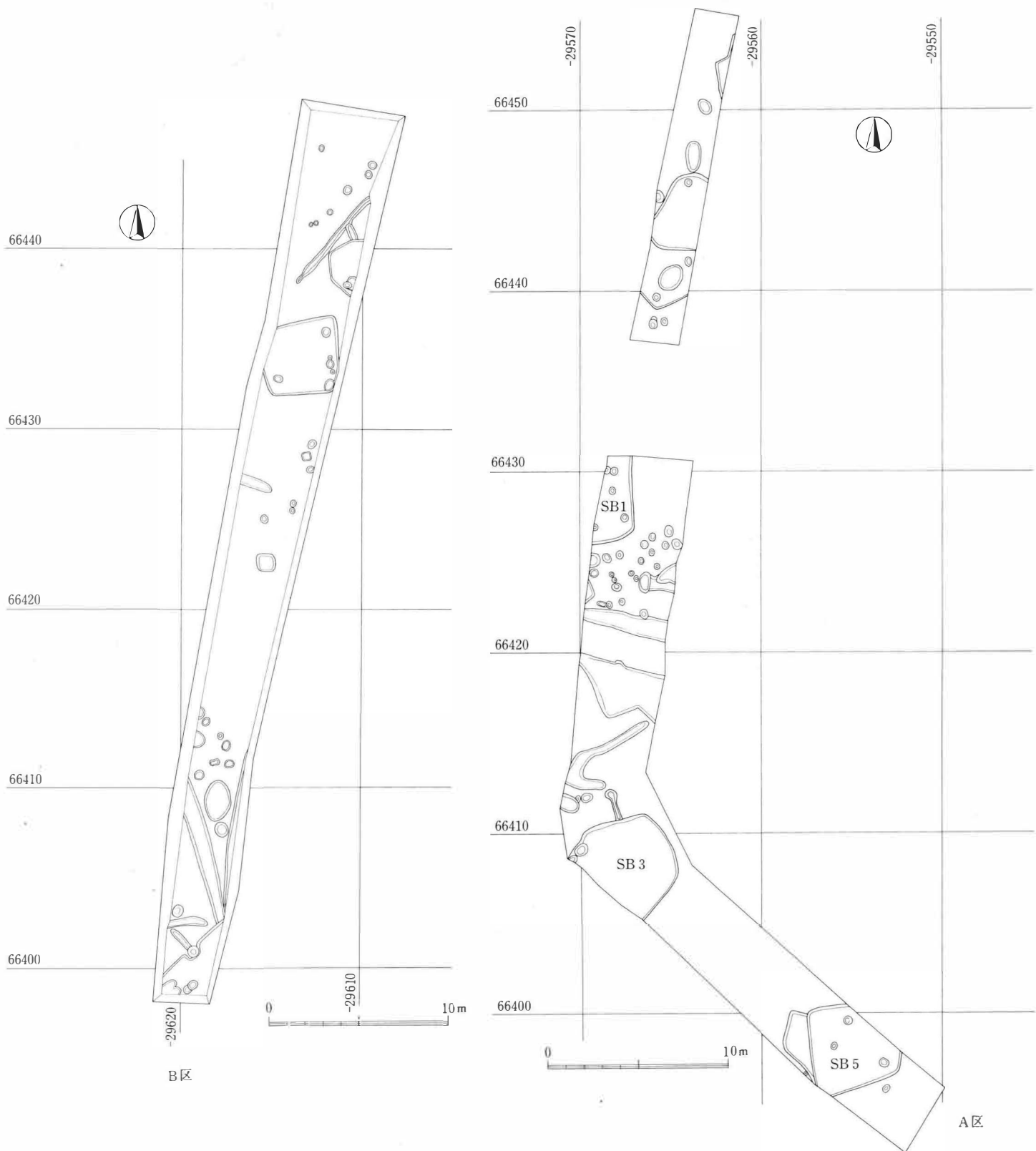
写真1 調査風景



写真2 B区全景

地区	遺構	時代	出土遺物		備考
			土器	その他	
A	SB1	古墳時代	土師器		
A	SB2	平安時代	土師器 須恵器		
A	SB3	古墳時代	土師器		
A	SB4	古墳時代	須恵器横瓶片		SB3上に重複するが、形態等不明
A	SB5	古墳時代	土師器 須恵器		
A	SB6	平安時代	土師器		
A	SB7	古墳時代	土師器 須恵器		土器群は床面上から一括出土
A	SB8	古墳時代か	土師器小片		
A	SD1	平安時代か			
A	SD2	平安時代	土師器		
A	SD3	平安時代か			
A	SD4	平安時代か			
A	SK2	平安時代か			
B	SB9	古墳時代	土師器片		
B	SB10	古墳時代か			
B	SB11	平安時代	土師器		
B	SB12	古墳時代か	土師器甕片		
B	SB13	古墳時代か			
B	SK4	不明			

第1表 平成6年度調査区遺構一覧表



第6図 平成6年度調査地点遺構分布図 (1:200)

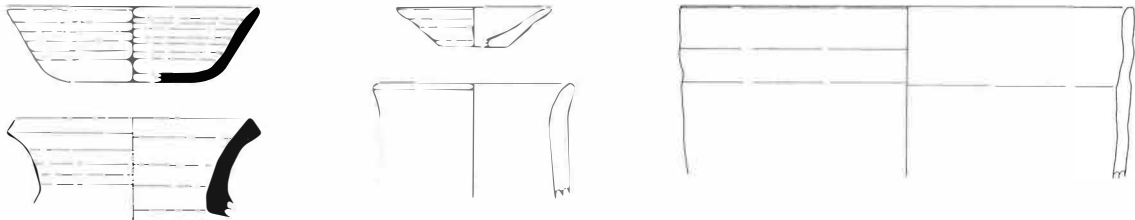
3 平成7年度発掘調査の概要

平成7年度は平成6年度調査区の南側部分を対象に発掘調査を実施した。調査対象地は、平成5年度に実施した確認調査（試掘）において試掘坑が設定されていない不明瞭な部分を含むため、表土掘削作業は包含層を追いかける形で実施した。調査は北側より着手したが、当初、遺構の存在がみとめられなかったことより、試掘坑を掘削し、遺跡範囲の把握に努めた。遺構は、平成6年度に調査を実施したB区付近より分布が認められるようになり、ここより順次東側に掘削範囲を拡大した。調査区東端部付近では包含層が極めて薄くなり、A区東端部同様に地形変換点にあたるものと考えられた。この結果、上九反遺跡は当初の予測を大きく越えた範囲に展開し、特に南側では調査対象地外まで広がっていることが確実となった。

検出された遺構は古墳時代後期・奈良時代・平安時代の竪穴住居12軒、土坑14基、溝14条で、このほか多数のピットを調査した。竪穴住居跡は古墳時代後期を主体として調査区中央東寄りに固まって分布する。この住居の密集分布は地形との関連性が考えられ、狭い微高地がA・B区を北端として、南東方向に延びていたものと考えられる。溝跡は平安時代を主体とする。住居がほとんどないことから、別地点にある集落の縁辺部に当たるものと考えられる。



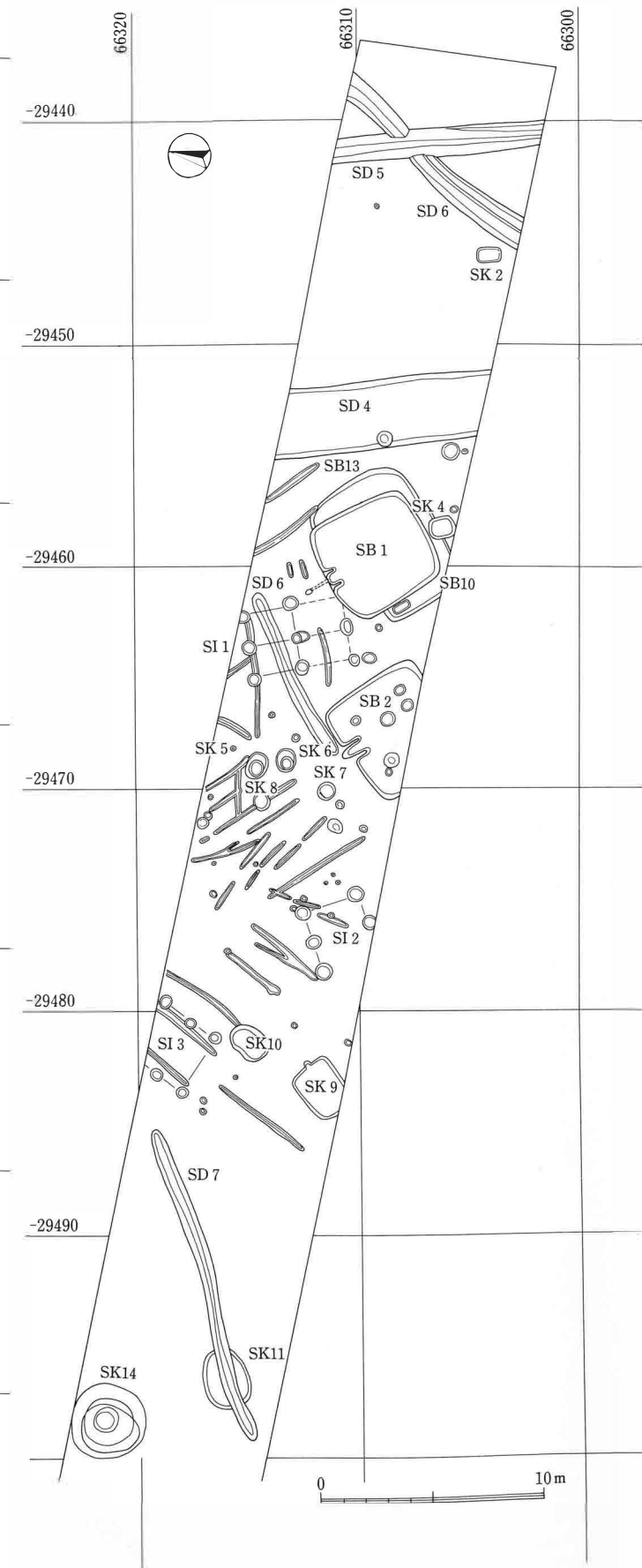
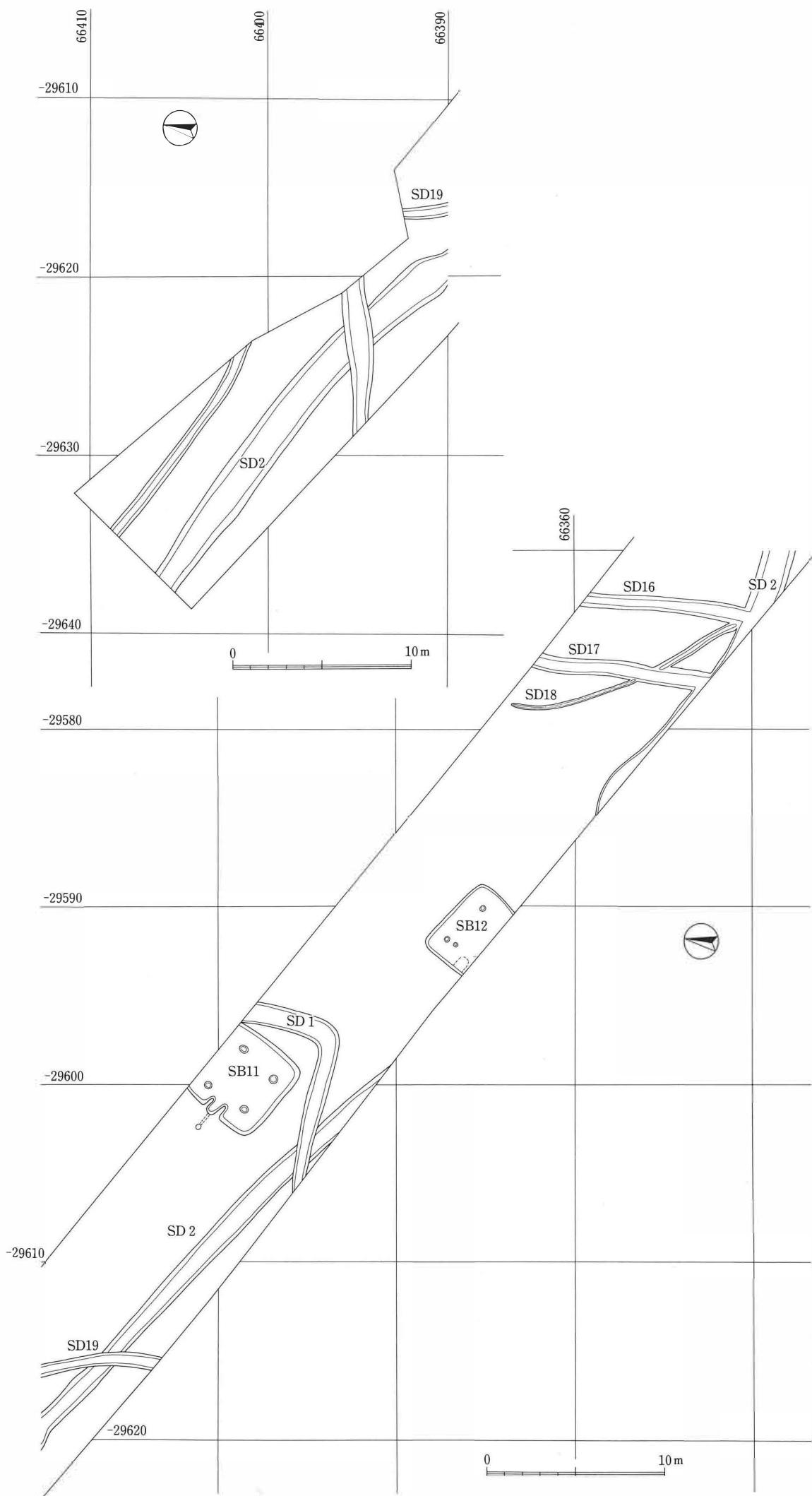
写真3 調査風景



第7図 C区検出面出土土器実測図（1：4）

地区	遺構	時代	出土遺物		備考
			土器	その他	
C	SB1	古墳時代	土師器 須恵器		須恵器1は覆土上層出土、混入品
C	SB2	奈良時代か	土師器		
C	SB3	奈良時代	土師器 須恵器	鉄製紡錘車1 軽石錘1	墨書土器あり
C	SB4	平安時代	須恵器		
C	SB5	古墳時代か		紡錘車（石製1 土製1）	
C	SB6	古墳時代	土師器 須恵器	鉄鎌1 砥石1	
C	SB7	古墳時代	土師器 須恵器		
C	SB8			鉄鎌1	
C	SB9	古墳時代	土師器 須恵器	土鈴1	
C	SB10	古墳時代	土師器 須恵器		
C	SB12	古墳時代	土師器		
C	SD1	古墳時代	土師器		
C	SD2	平安時代	土師器 須恵器		
C	SD3	平安時代	土師器 須恵器		
C	SD4	古墳時代	土師器 須恵器		
C	SD7	奈良時代	土師器 須恵器		
C	SD9	古墳時代	土師器 須恵器		
C	SD11	平安時代	土師器		
C	SD12	古墳時代	土師器		
C	SD14	平安時代	土師器		
C	SK10	奈良時代	土師器 須恵器		
C	SK14	奈良時代	土師器 須恵器	鉄斧1	

第2表 平成7年度調査区遺構一覧表



第8図 平成7年度調査地点遺構分布図 (1:200)

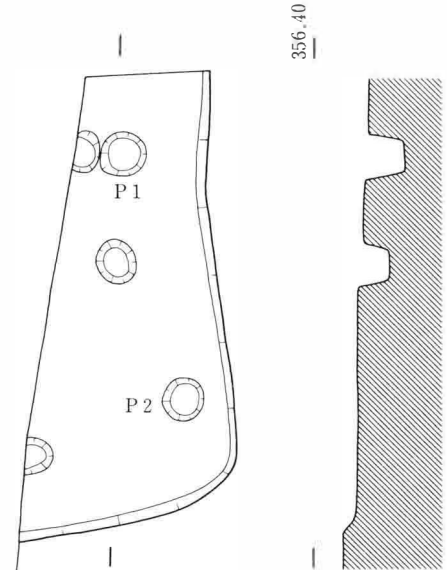
IV 調査結果

1 古墳時代

A区1号住居跡

調査A区の中央部際にて検出された。長辺約4m、短辺約1.2mを測るが北ならびに西側の大半が調査区外となるため、形態・規模とも明確にしえない。床面は全体に脆弱であり、西壁際付近でわずかに硬化面が確認できた程度である。ピットは5カ所検出されているが、P1・P2が他に比べて深く、柱穴に該当すると判断される。カマド等は検出されておらず、調査区外に存在するものと考えられる。

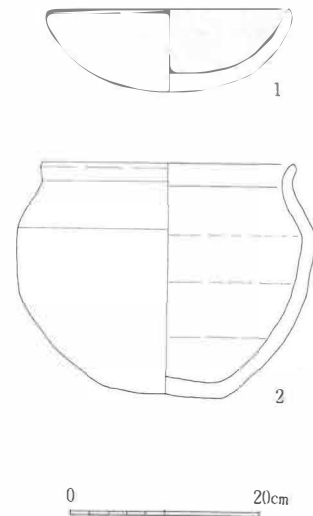
遺物は覆土中より土師器の出土がある。床面直上付近からの出土が最も多かったが、大半のものが細片と化し、残存状況は良くない。出土遺物は小形甕および杯のほかに、甕・杯・高杯などの破片が認められるものの、量的にはさほど多くはない。一部、平安時代に該当する土器の出土がみられるが、古墳時代後期の土師器が主体をなし、当住居跡の存在時期を示すものと判断される。



第9図 A区SB1実測図(1:80)



写真4 A区SB1



第10図 A区SB1出土土器実測図(1:4)

番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	土師器 杯	12.6	9.6	4.4	砂粒を含む	外面：ナデ 内面：ミガキ 黒色処理	覆土
2	土師器 甕	13.2	6	12.2	砂粒を多く含む	内外面：ナデ	覆土

第3表 A区SB1出土土器観察表

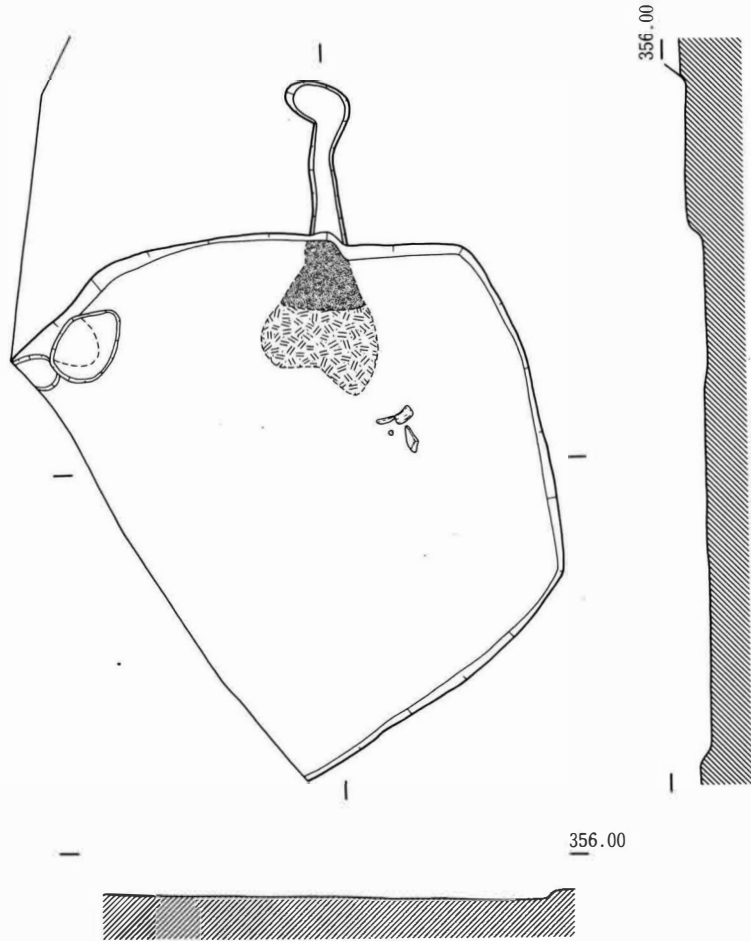
A区3号住居跡

調査A地区の南端部で検出された。南西角部は調査区外となるが、大半を調査しえたと判断できる。

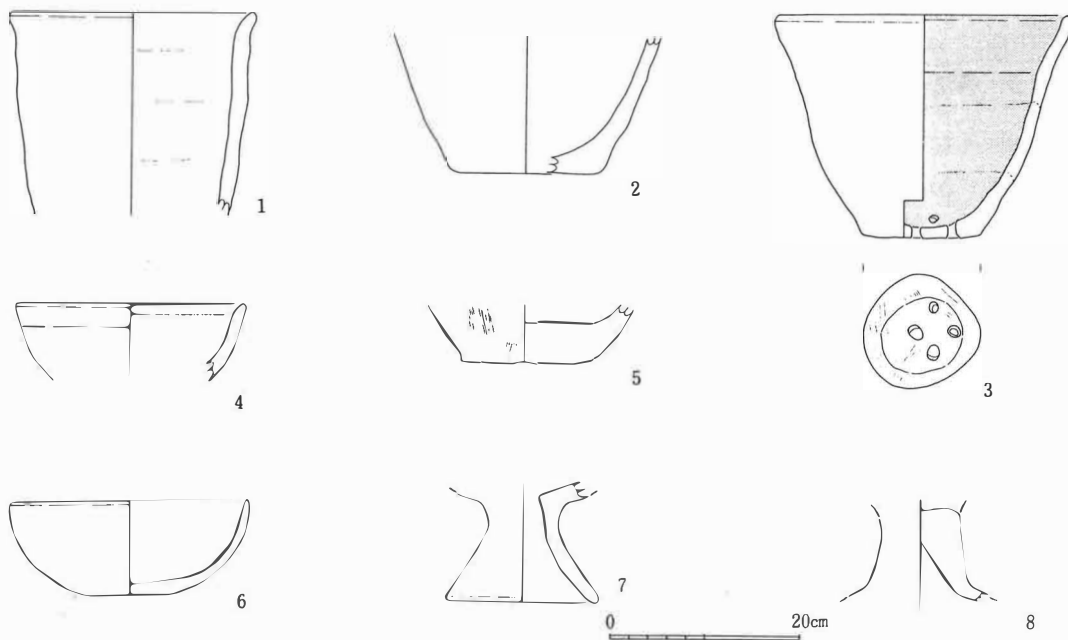
一辺約4mを測る不整形形を呈する。床面は焼土および炭の分布範囲の南側を中心に床が確認できたが、壁際までは貼られておらず、全体的に脆弱である。柱穴は検出されなかった。カマドは北壁中央部より北に煙道が伸びているため存在は疑いえないが、焼土の分布が認められるのみで、完全に破壊されたと考えられる。袖部石材の抜き取り痕跡等も認められない。

遺物はカマド付近とできる焼土分布範囲の東側を中心に床面上から土師器が出土している。

出土遺物は図示しえたものとして土師器甕・甑・高杯・杯が



第11図 A区SB3実測図(1:80)



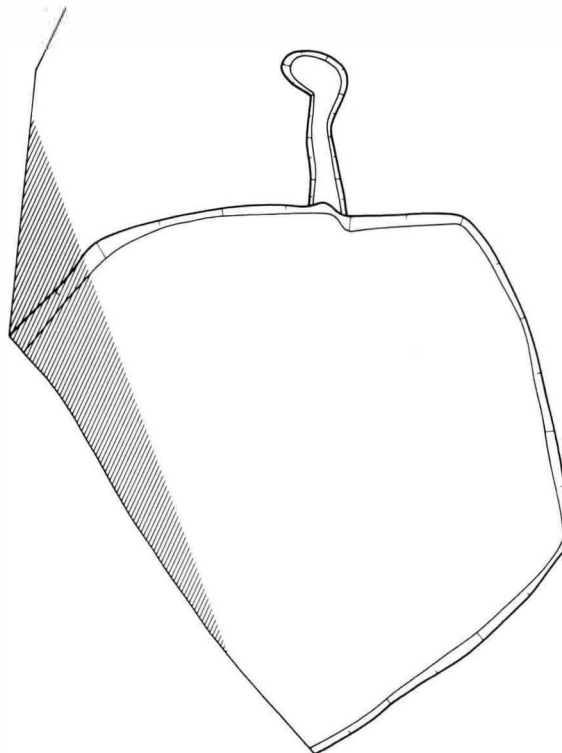
第12図 A区SB3出土土器実測図(1:4)

ある。このほか、さらに土師器甕等の破片が認められる。いずれも古墳時代後期の所産と判断される。

なお、当住居跡南西隅部の土坑付近を中心に、一部覆土が微妙に異なる部分を確認し、別遺構の存在を予測して検出に努めた。壁際付近より南西方向の調査区外へと延びる遺構（第13図トーン部）の存在を確認し、4号住居跡として調査を行った。しかし、明確な掘り込みや壁面の確認はできず、規模・形態ともに把握できなかった。

出土遺物は4号住居想定範囲より須恵器横瓶1点の出土がある。3号住居とは時期が異なり、4号住居に伴うものと考えたい。

なお、住居跡として報告するが、形態把握が不十分であり、溝跡の可能性も残る。



第13図 A区SB4位置図（1：80）

番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	土師器 甕	12.8			石英、金雲母等砂粒を含む	内面：ナデ	覆土中
2	土師器 甕		8.2		砂粒を多く含む		覆土中
3	土師器 甗	13.4	6.4	11.9	石英・金雲母等砂粒を含む	ヨコナデ 内面：黒色処理	床面上
4	土師器 杯	12			砂粒を多く含む	ミガキ（不明瞭）	覆土中
5	土師器 甕		7		砂粒を多く含む	ナデ	覆土中
6	土師器 杯	8.8		4	砂粒（石英他）を多量に含む	ナデ	床面上
7	土師器 高杯		7.8		砂粒を含む	外面：ミガキか 内面：ナデ	覆土中
8	土師器 高杯				砂粒を多く含む	外面：ミガキか 内面：ナデ	覆土中

第4表 A区SB3出土土器観察表

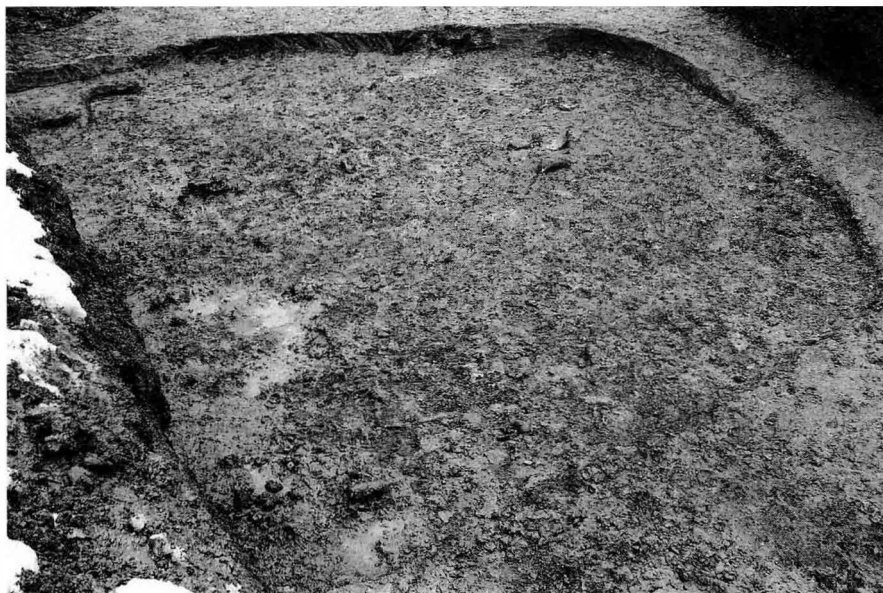
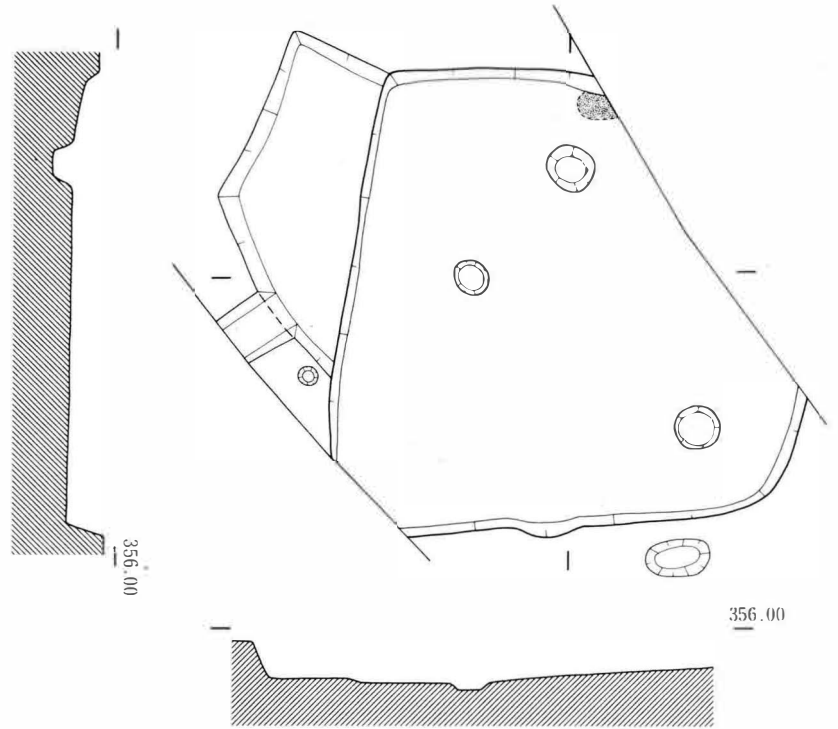


写真5 A区SB3・4

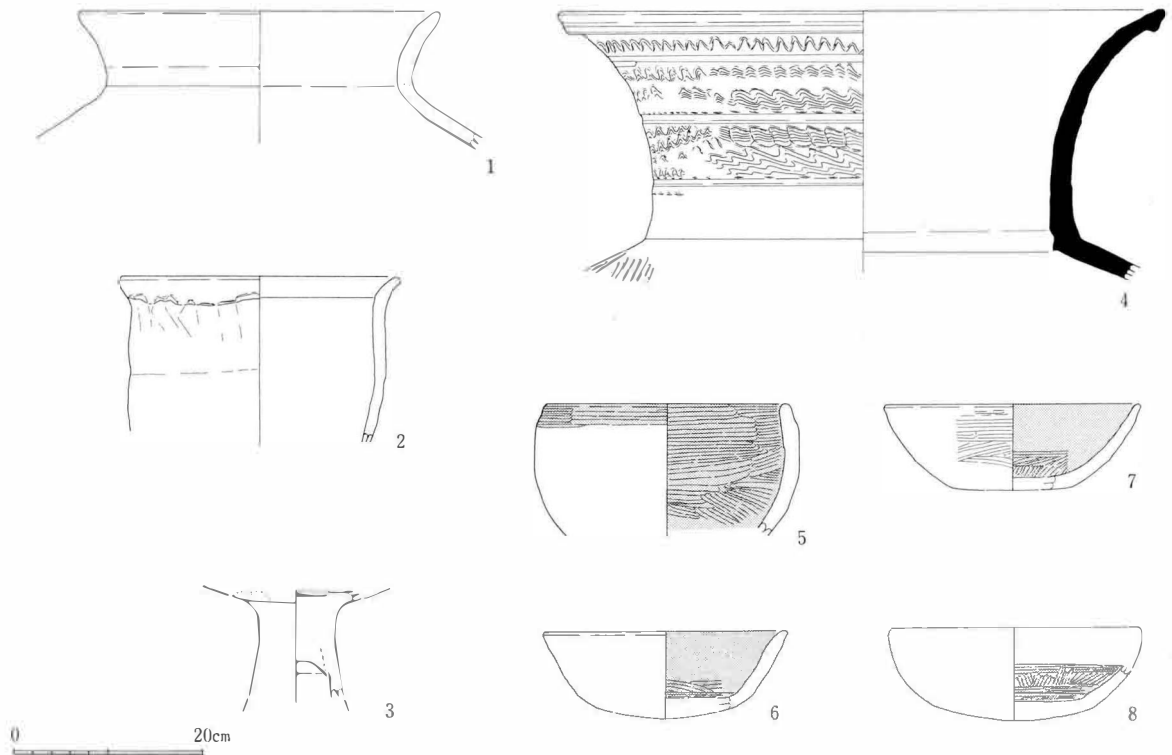
5号住居跡

調査A地区の南東端部にて検出された。一辺約10mを測る方形の大型住居跡である。確認面からの掘り込みは最深で40cmと深い。床面は全面より一部貼床を含む硬化面が確認されており、非常に明瞭である。柱はP1が柱穴に該当すると判断できるが、他には検出されなかった。カマドは北壁床面上に焼土の分布が認められ、カマドが存在したと判断できるものの、カマド本体および煙道の検出はない。

また、南壁中央部に張り出し部分がみられ、入り口施設に伴うと考えられる。遺物の出土はカマド付近および床面中央部から出土している。復原を含め完形品の出土こそみられないが、



第14図 A区SB5実測図(1:80)



第15図 A区SB5出土土器実測図(1:4)

各個体の残存状況は比較的良好である。

出土遺物は、土師器壺・甕・高杯・碗・杯・須恵器甕の出土がある。時期が大きく異なる遺物の混入はなく、いずれも古墳時代後期の所産と判断される。

番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	土師器 甕	19			石英・金雲母等砂粒を含む	ナデ	覆土
2	土師器 甕	14.6			石英・長石・金雲母等砂粒を多量に含む	外：ケズリ・ナデ 内：ナデ	覆土
3	土師器 高杯				砂粒を多量に含む	内：黒色処理	覆土
4	須恵器 甕	32			白色砂粒を含み、精緻	外：タタキ 内：回転ナデ	覆土
5	土師器 碗	12.7			石英・長石・金雲母等を多量に含む	ミガキ 外一部・内面 黒色処理	覆土
6	土師器 杯	12.8			石英粒等を多量に含む	ミガキ 内：黒色処理	柱穴内
7	土師器 杯	13.4		4.5	砂粒を若干含み、精良	ミガキ 内：黒色処理	覆土
8	土師器 杯				石英等の砂粒を含むが、良好	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	覆土

第5表 A区S B5出土土器観察表



写真6 A区S B5

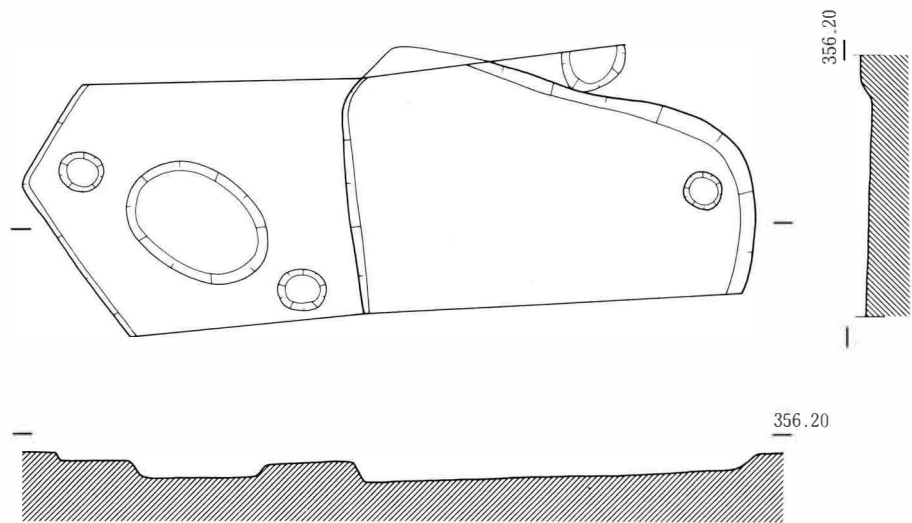


写真7 A区S B7完掘状況

A区7号住居跡

A区の北端部にて検出された。当住居跡以北では、住居跡は確認されず、最も北に位置する。

およそ半分が調査区外となるが、一辺約4.5mを測る方形プランの住居跡と考えられる。南側において、平安時代の8号住居跡と重複関係を有するが、床面の高さの違いから、8号住居の掘り込みに伴う破壊は上層部に



第16図 A区SB7実測図(1:80)

止まり、床面までは達していない。出土土器群が掘り込みに伴う攪拌を受けていないことから明らかである。

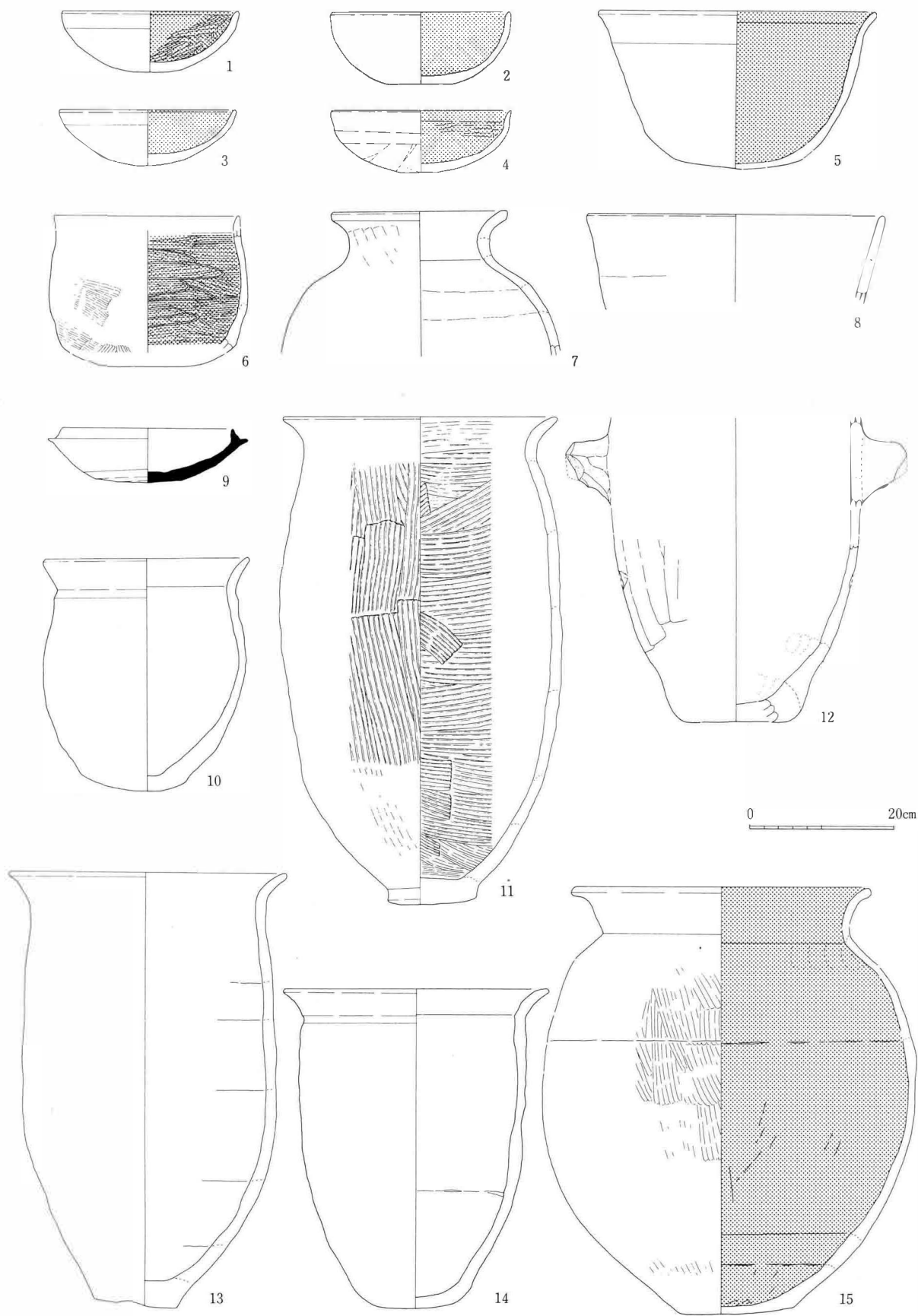
床面は貼床でほぼ全面にて確認できた。貼床は1面である。柱穴は床面の残存状況が良好であったことから検出に努めたが、見出すことはできない。カマド等の施設は調査区内より検出されていないが、甕11は炭上より出土しており、カマドに関わるものとみられる。遺物の出土状況からは北壁調査区外に存在すると考えられる。

遺物は床面上より、多量の完形土器が出土している。土師器杯・鉢・壺・甕のほか、須恵器杯身がある。それぞれ正置された状態で廃棄され、その後土圧で押しつぶされたと想定できる状況であった。規則的な配列や重なりはなく、住居廃絶に伴う祭祀行為等の想定は難しい。これらの土器群は良好な一括資料とでき、特に須恵器は陶色編年II型式5段階(TK43型式)併行と判断され、古墳時代後期に該当する。

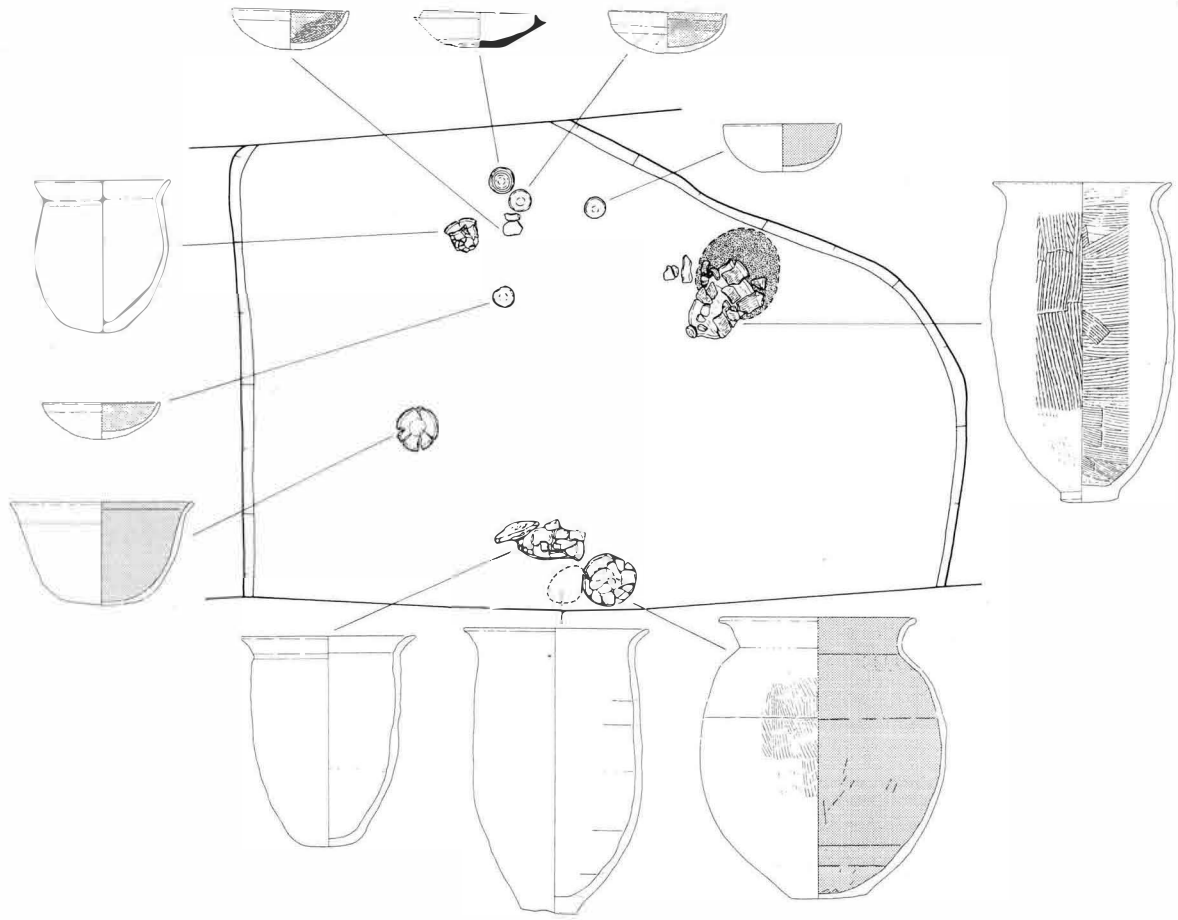
なお、8号住居跡からは土器細片が出土しているが、図化掲載できる資料はなかった。

番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	土師器 杯	12.4		4.2	長石・石英粒を含むものの。良好	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	床面上
2	土師器 杯	12.6		5	長石・白色砂粒を多量に含むものの、良	ナデ 内：黒色処理	床面上
3	土師器 杯	12.4		3.9	長石・石英粒を含むが、良好	ナデ 内：黒色処理	床面上
4	土師器 杯	12.7		4.3	石英・長石粒を多量に含む、粗い	ナデ 外面下半にケズリ	床面上
5	土師器 碗	19		11	石英・白色砂粒を多量に含むが、良好	ナデ 内：黒色処理	床面上
6	土師器 碗				砂粒を若干含む、精良	外：ナデ 下半はミガキ後ナデ	床面上
7	土師器 壺	12.2			長石・石英粒を多量に含む、粗い	ケズリ後、ナデ	覆土下層
8	土師器 碗か	20.6			石英・金雲母等の砂粒を多量に含む	ナデ	覆土
9	須恵器 杯身	11.8		3.8	小石(2~5mm大)を多量に含む、不良	回転ナデ 内面に仕上げナデ	床面上
10	土師器 甕	14	7.3	16.3	長石・石英粒を多量に含む、やや粗い	ナデ	床面上
11	土師器 甕	19	6.2	34.1	金雲母他、砂粒を多く含む、やや粗い	ハケ	床面上
12	土師器 甕			6	石英・金雲母等の砂粒を多量に含む、粗	ナデ 外面 ケズリ後など 把手部 貼り付け	覆土下層
13	土師器 甕		9.0		石英・金雲母を若干、砂粒を多量に含む	外：ケズリ 内：ナデ	カマド
14	土師器 甕	19.7	5.9	30.2	砂粒の他小石を含む、やや粗い	磨耗著しい(外：ハケ内：ナデ)	床面上
15	土師器 甕	20.4	4.8	22.5	石英等の砂粒を多量に含む、やや粗い	ナデ	床面上
16	土師器 壺	20.5	7.9	29.7	石英・金雲母他砂粒を含む、良	外：ナデ ミガキ 内 ナデ	床面上

第6表 A区SB7出土土器観察表



第17图 A区SB7出土土器实测图(1:4)



第18図 A区S B 7 遺物出土状況図 (1 : 40)

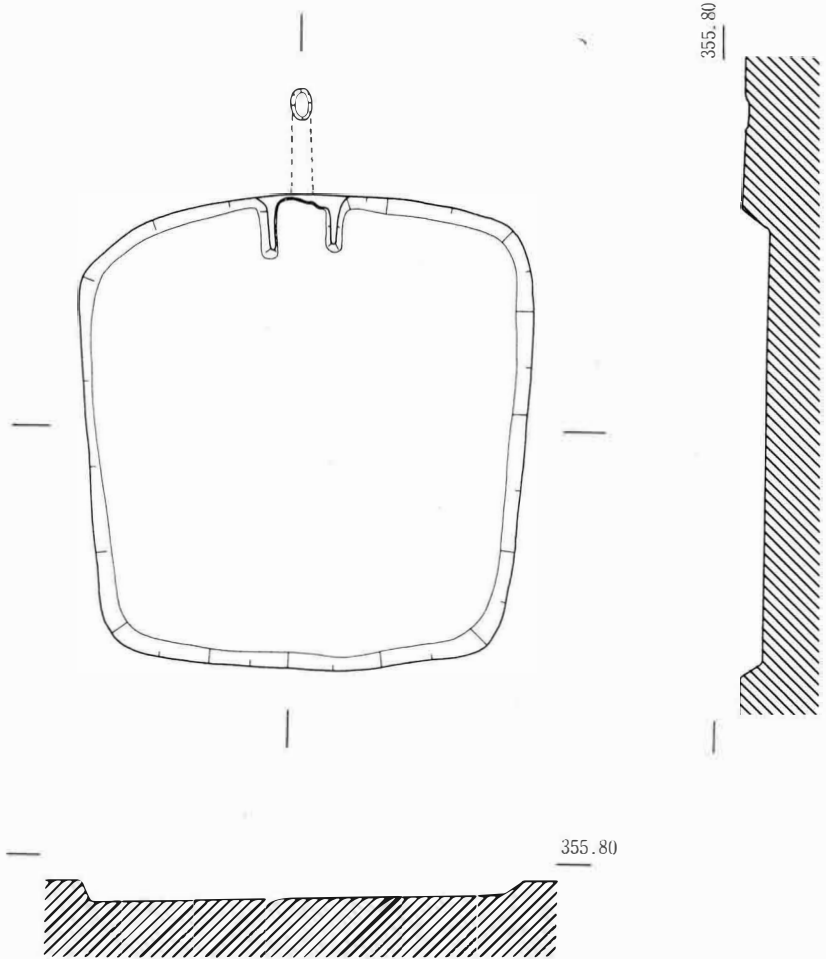


写真8 A区S B 7 遺物出土状況

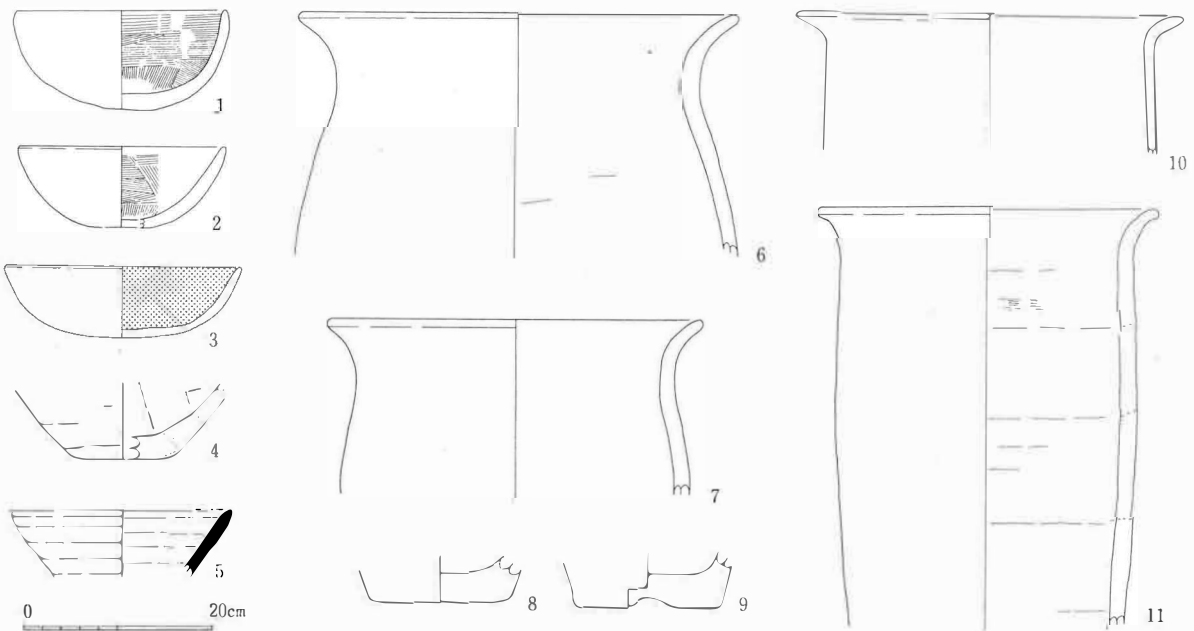
C区1号住居跡

C区の東端で検出された。10号住居跡を掘り込んで構築されている。一辺約4mを測る方形プランを呈し、北壁にカマドが確認されている。袖はすでに残存しておらず、その痕跡を止めるにすぎない。煙道ならびに煙出しもかろうじて確認されているにすぎず、全体的に残存状況はよくない。煙道はカマド側より緩やかな傾斜を有して0.8m程壁外へ延び、直立した煙出しへと続く。床面は明確な貼床はみられず、幾分硬化した面をもって床と判断した。柱穴の確認もない。

出土遺物には土師器があり、覆土全体より出土している。全様が把握できるものはほとんどなく、破片の出土が大半を占める。出土器種が杯と甕に限られることも本来の組成を示してはいない。なお、須恵器杯が1点出土しているが、後世の混入とみられる。



第19図 C区SB1実測図(1:80)



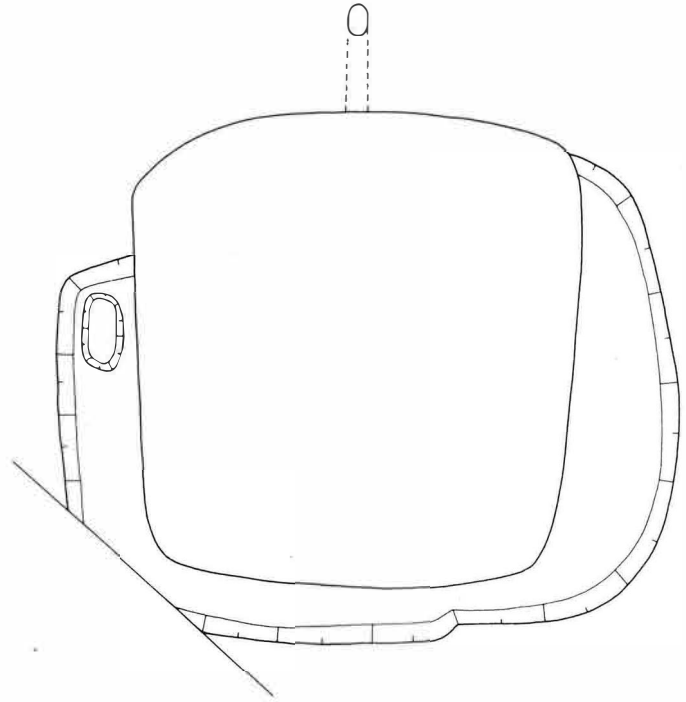
第20図 C区SB1出土土器実測図(1:4)

C区10号住居跡

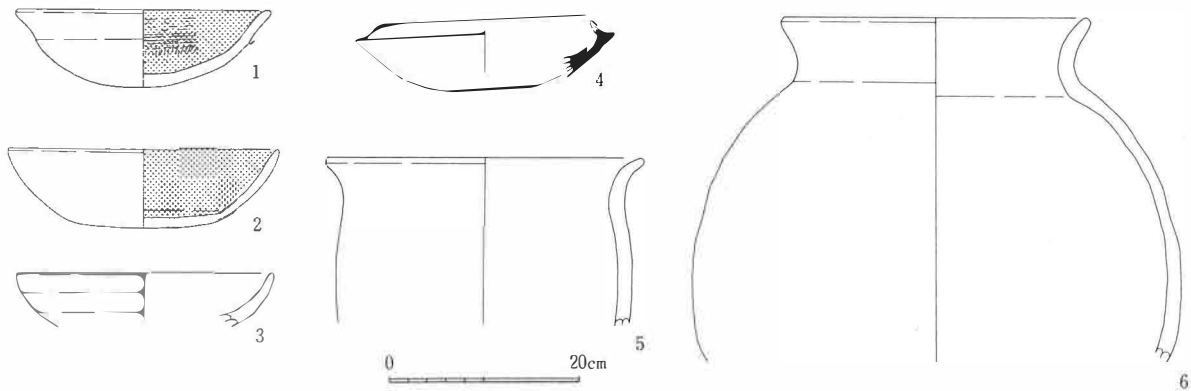
C区1号住居跡の調査に伴い、その周囲から検出された住居跡である。中心部にはC区1号住居が重複しており、大半が失われている。南壁に屈曲部がみられることから土坑2基の重複ともみられるが、床面レベルの一致から1軒の竪穴住居跡と判断した。

およそ6.5m×5mの長方形プランを呈するが、カマド・柱穴などの施設は確認されていない。床面は21号住居跡とほぼ同レベルで硬化面が確認でき、出土遺物の状況からも床として判断した。また、C区1号住居同様に柱穴の確認もない。

遺物は床面直上を中心に、少量の土師器・須恵器片がみられたにすぎない。



第21図 C区S B10実測図(1:80)



第22図 C区S B10出土土器実測図(1:4)

番号	器種	口径	底径	器高	胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
〈SB1〉							
1	土師器 杯	11.2		5.1	石英等の砂粒を含み、精良	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	覆土下層
2	土師器 杯	11		4.2	小石・砂粒を多量に含み、やや粗い	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	覆土
3	土師器 杯	12.6		3.8	微小石・砂粒を多量に含み、やや粗い	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	床面上
4	土師器 甕			5.6	石英・金雲母等の砂粒を含むが、良	ナデ	床面上
5	須恵器 杯	11.6			白色砂粒を含み、精良	回転ナデ	覆土上層
6	土師器 甕	23			石英・金雲母等の砂粒を含むが、良	ナデ	床面上
7	土師器 甕	19.6			小石・石英等の砂粒を含み、やや粗い	外：ハケ 内：ナデ	覆土
8	土師器 甕			7.4	小石・石英等の砂粒を含むが、良	ナデ	覆土下層
9	土師器 甕			7.9	石英・金雲母等の砂粒を多量に含み、粗	ナデ	覆土下層
10	土師器 甕	20			石英等を多く含むが、良	ナデ	覆土上層
11	土師器 甕	17.6			小石・石英等を多量に含み、粗い	外：タテハケ 内：ヨコハケ	覆土下層
〈SB10〉							
1	土師器 杯	13.3		4.2	小石・石英等の砂粒を多く含み、粗い	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	床面直上
2	土師器 杯	14.2		4.2	小石・石英等の砂粒を多く含み、粗い	外：ナデ 内：ミガキか 黒色処理	覆土
3	須恵器 高杯				白色砂粒を若干含み、精緻	回転ナデ 焼成はあまい	床面直上
4	須恵器 杯身				白色砂粒を若干含み、精緻	回転ナデ	覆土
5	土師器 甕	16.6			石英・金雲母等を多く含むが、良	ナデ	床面直上
6	土師器 壺	16.2			小石・石英等の砂粒を多く含みやや粗い	内外面ともに丁寧なミガキ	床面直上

第7表 C区S B1・10出土土器観察表

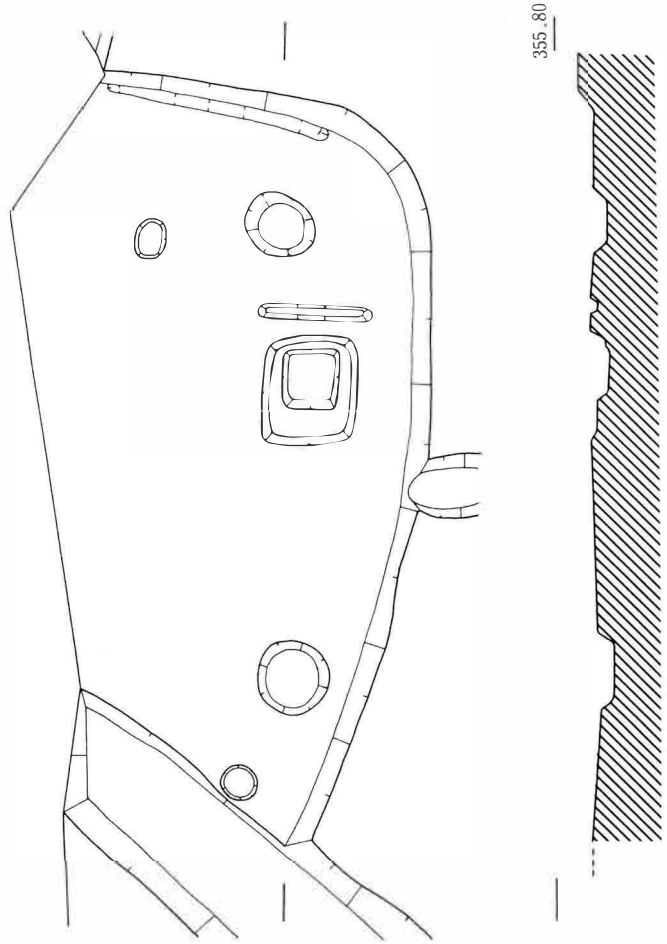
C区6号住居跡

C区住居密集部分の西端部に位置する。北西側を4号溝に切れ、また北側約半分が調査区外となる。

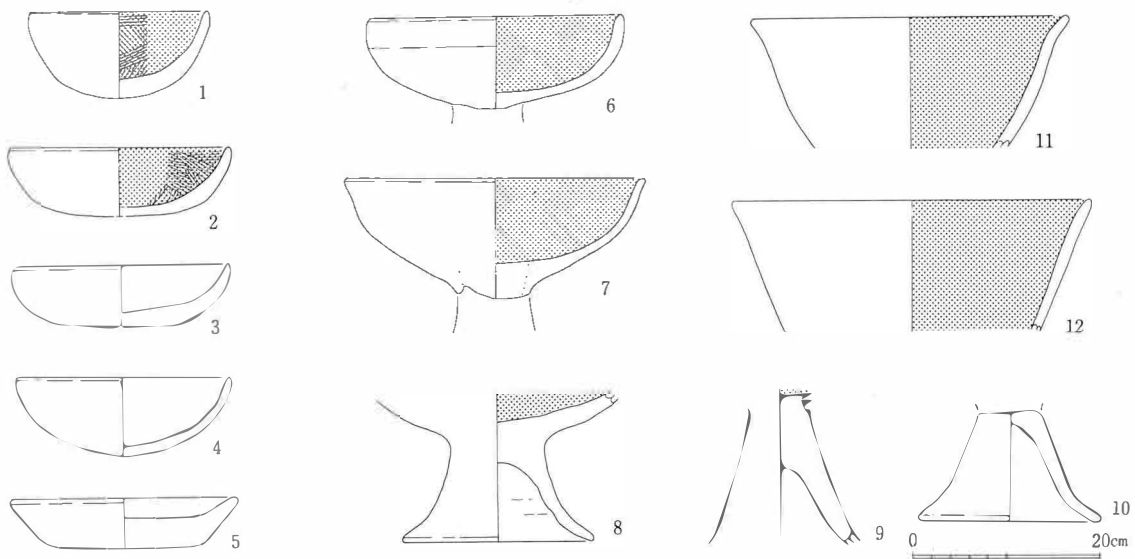
カマドの確認はなく、他住居の傾向から調査区外の北壁に存在するものと想定される。柱穴は2カ所確認されており、4本主柱による方形プランの住居とみられる。柱穴間には方形二段掘りのピットが存在するが、形態や覆土からは当住居に伴うものとは考えがたい。

床面は部分的ではあるが、貼床が確認されている。また、床面上には部分的に炭化材の分布が認められた。東壁側に顕著な分布状況を示すが、一般にみられる火災住居ほどには炭化材や焼土の確認はなく、柱穴内に柱材の残存も認められない。これらの諸点からは、屋根等の上屋を除いた後に意図的に不要材に火を付けたものとみることができる。土器群は炭化材の上より出土しており、鎮火後、置かれたものと考えられる。

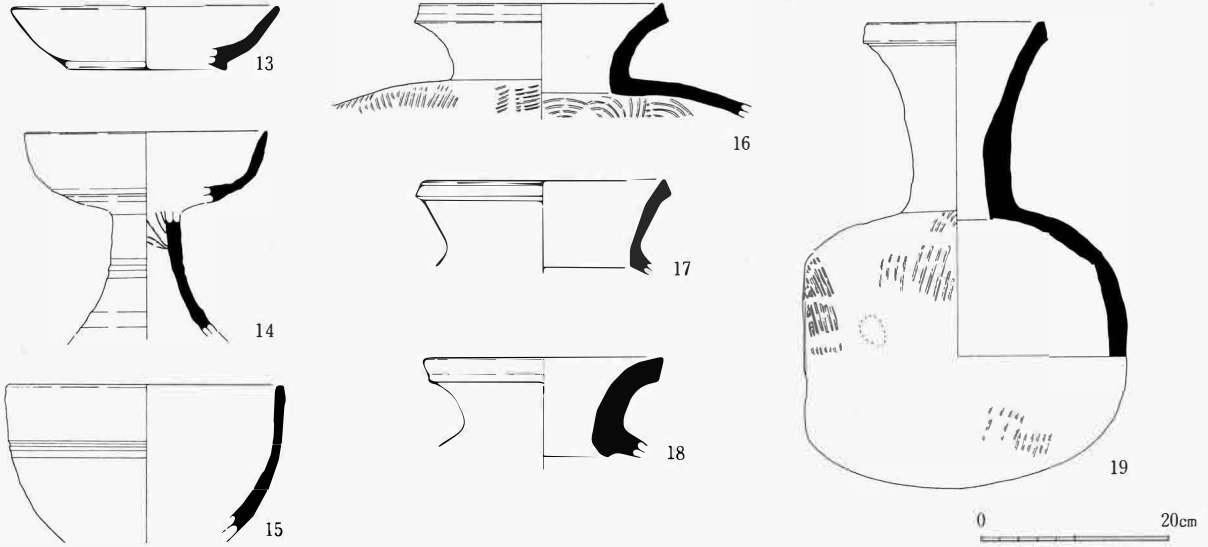
出土遺物は、土師器・須恵器・鉄製品（鉄鎌）の出土がある。細片が多く、図化できないものが多いが、出土土器量は多い。また、須恵器瓶類の出土が多い点も指摘できる。鉄鎌は曲刃で、覆土中より1点出土している。



第23図 C区SB6実測図(1:80)



第24図 C区SB6出土土器実測図①(1:4)



第25図 C区SB6出土土器実測図②(1:4)

番号	器種	口径	底径	器高	胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
1	土師器 杯	9.4		4.6	石英・金雲母等の砂粒を若干含み、良	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	覆土
2	土師器 杯	11.8		3.6	石英・金雲母等の砂粒を若干含み、精良	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	床面直上
3	土師器 杯	11.4		3.4	石英・金雲母等の砂粒を多量に含むが良	ミガキか(器壁の磨耗著しい)	床面直上
4	土師器 杯	11.4		4.3	小石・砂粒を多量に含み、やや粗い	ミガキか(器壁の磨耗著しい)	床面直上
5	土師器 杯	12	8.4	2.7	小石・石英粒等を多量に含み、やや粗い	ナデ 底部ミガキ	床面直上
6	土師器 高杯	13.4			小石・石英粒等を多量に含み、やや粗い	ミガキ 黒色処理	床面直上
7	土師器 高杯	15.8			石英・金雲母を若干含み、良	ミガキ 口縁外面・内面 黒色処理	覆土
8	土師器 高杯				石英・金雲母等の砂粒を若干含み、良	ナデ 杯内面 黒色処理	床面直上
9	土師器 高杯				小石・石英他の砂粒を含むが、良	丁寧なナデ 杯内面 黒色処理	床面直上
10	土師器 高杯				小石・砂粒を含むが、良	外：ミガキか 内：ナデ	床面直上
11	土師器 鉢	16.4			石英・金雲母等を含み、良	ナデ 内面黒色処理	床面直上
12	土師器 鉢	18.6			石英・金雲母等を含み、良	外：ナデ 内：ミガキ? 黒色処理	炭化材上
13	須恵器 高台付杯	14.1	8.7	3.4	白色砂粒を若干含み、良	回転ナデ	覆土下層
14	須恵器 高杯	12.7			白色砂粒を若干含み、精緻	回転ナデ	覆土上層
15	須恵器 高杯	14.4			白色砂粒を若干含み、良	回転ナデ	炭化材上
16	須恵器 横瓶	13			白色砂粒を多量に含み、粗い	外：平行タタキ 内：当て具痕	覆土上層
17	須恵器 横瓶	12.8			白色砂粒を多量に含み、粗い	回転ナデ 頸部差し込み成形	覆土
18	須恵器 横瓶	12.6			白色砂粒を若干含み、良	回転ナデ 頸部差し込み成形	覆土
19	須恵器 横瓶	8.6		25	白色砂粒を若干含み、良	外：平行タタキ 内：ナデ	炭化材上

第8表 C区SB6出土土器観察表



写真9 C区SB6

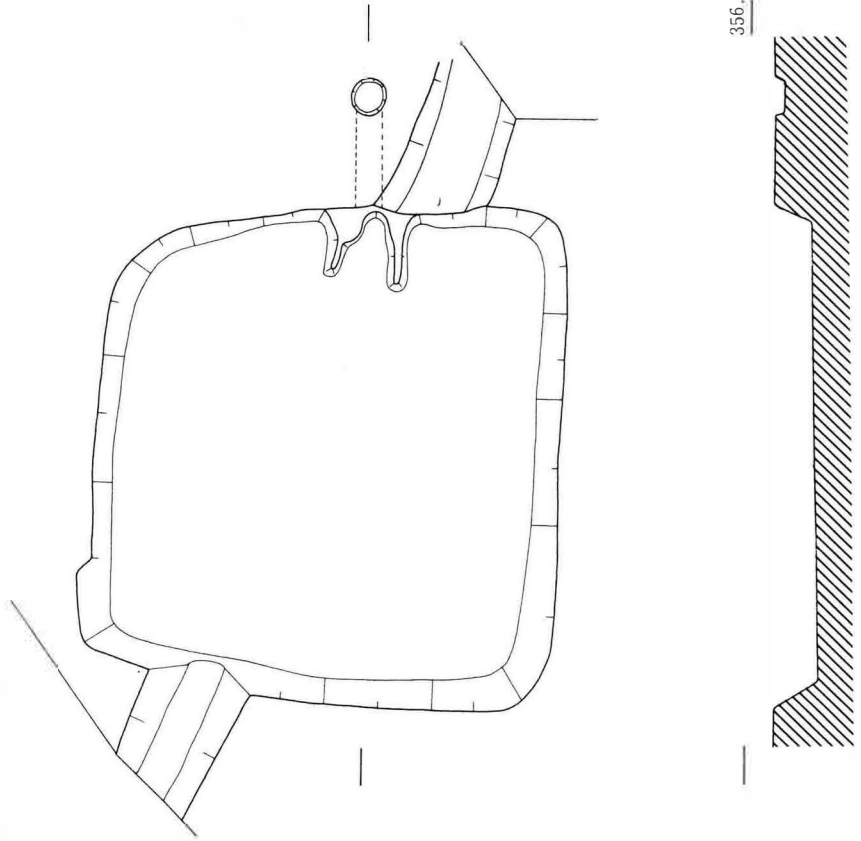


写真10 C区SB6遺物出土状況

C区7号住居跡

C区6号住居の東側にて検出されており、14号溝と重複関係を有する。切りあいの新旧関係は14号溝が当住居を横断するように掘削されているが、溝は浅く、下層までは達していない。

一辺約2.5mを測る方形プランの小型住居である。カマドは北西壁で確認されているが、14号溝掘削によって上部は残存していない。焼土も顕著ではなく、全体的に残存状況は悪いが、脇を中心に土器群が出土している。煙道は壁外へ緩やかな傾斜を有して約1m延び、直立した煙出しへと続く。床面はカマド底にあわせて硬化面が確認されたが、明確な貼床等ではない。また、柱穴の確認もない。



第26図 C区SB7実測図(1:80)

出土遺物には土師器(杯・高杯・甑・鉢)・須恵器(甕)があり、比較的まとまった資料である。



第27図 C区SB7出土土器実測図(1:4)

番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	土師器 杯	12		4.1	金雲母等の砂粒を若干含み、精良	外：ナデ ケズリ	カマド
2	土師器 杯	10		4.2	砂粒を若干含み、精良	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	床面上
3	土師器 小型鉢	4.6		5.4	石英・金雲母等を多量に含み、やや粗い	ナデ 内；黒色処理	覆土
4	土師器 鉢	9.6			石英・金雲母等の砂粒を含み、やや粗い	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	覆土下層
5	土師器 鉢	12.8		9.8	石英・金雲母等を多量に含み、やや粗い	ナデ ミガキ 内；黒色処理	覆土下層
6	土師器 甌	15.4		12	石英・長石・金雲母を若干含み、良	ナデ 内面下半ケズリ	カマド
7	須恵器 甌	14.6			白色砂粒を含み、良	回転ナデ	覆土
8	須恵器 甌				白色砂粒を含み、良	ナデ 底部付き出ししか	覆土
9	土師器 高杯	17.4		16.4	石英・金雲母等を多量に含み、やや粗い	ナデ 脚内面上半ケズリ 杯部内面 黒色処理	カマド
10	土師器 高杯	14.4		13.1	小石・石英・金雲母等を多量に含み、粗	ナデ 脚内面上半ケズリ 杯部内面 黒色処理	床面上
11	土師器 高杯				長石ほかの砂粒を若干含み、良	ナデ	カマド脇

第9表 C区SB7出土土器観察表



写真11 C区SB7全景

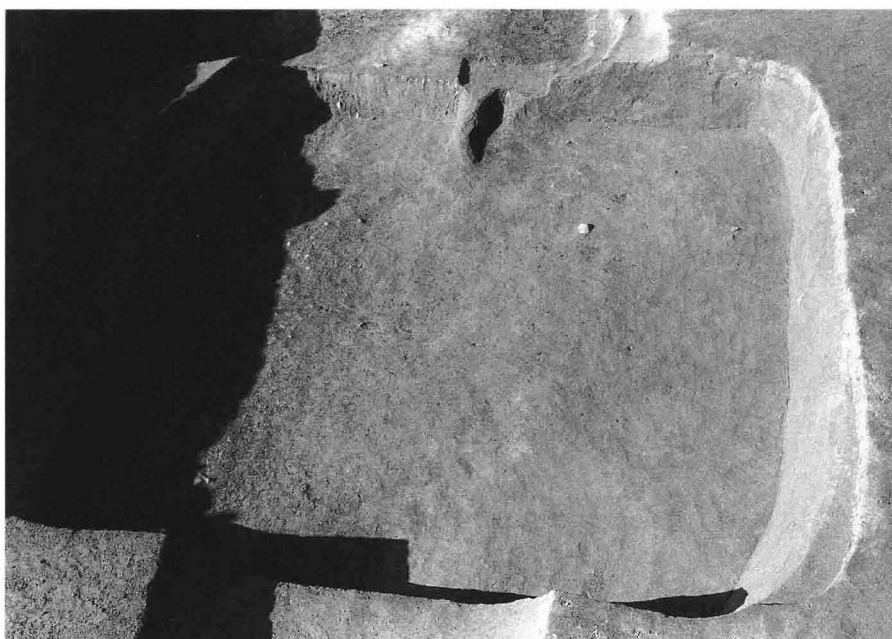


写真12 C区SB9完掘状況

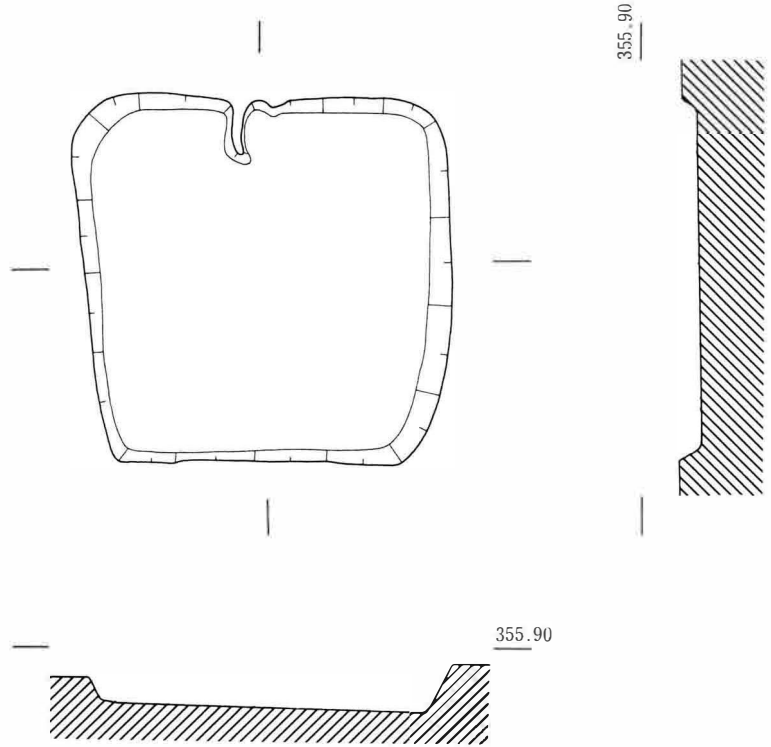
C区9号住居跡

住居密集部分の東端部で確認された。
2号溝と重複関係を有するが、2号溝の掘削深度がそれほど深くないため、覆土下層までは達していない。

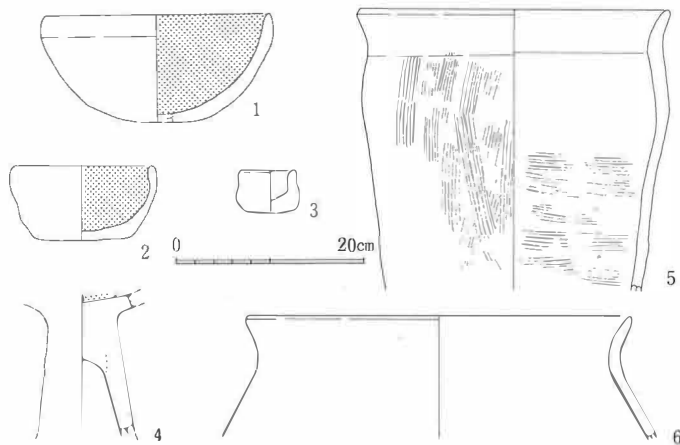
一辺3.8mの小型方形住居跡である。床面は明瞭な貼床等ではなく、硬化面が一部で確認されたにすぎない。また、柱穴の確認もない。西壁にはカマド左袖の残存かと考えられる硬化した土塊が確認されているが、火床も含め焼土は顕著に散布していない。煙道および煙だしは14号溝の重複によって失われている。

出土遺物は14号溝掘削レベルよりも下層覆土中よりミニチュアを含む土師器ならびに土鈴が1点出土している。土鈴は鐸形を呈し、内部に小石が入っている。

つまみの部分には円孔が2つ開けられているが紐等による釣り下げの痕跡は観察されない。長野市内では牟礼バイパスB地点遺跡や本村東沖遺跡において土鈴が出土しているが、鐸形のは初出である。



第28図 C区SB9実測図(1:80)



第29図 C区SB9出土土器実測図(1:4)

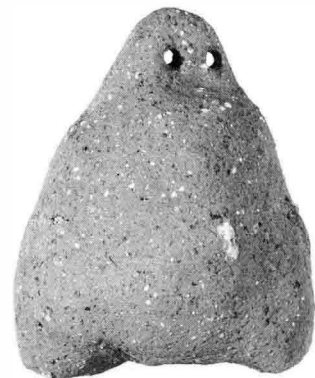


写真13 土鈴

番号	器種	法			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	土師器 杯	12.2		5.7	精良	外:ケズリ後ナデ 内:ミガキ後ナデ 黒色処理	覆土
2	土師器 杯	7.3		4	砂粒を若干含み、精良	ナデ	覆土
3	土師器 ミニチュア	2.9	2.5	2.3	石英等を若干含み、精良	ナデ	覆土
4	土師器 高杯				石英・金雲母等を含み、良	ナデか 杯部内面 ミガキ 黒色処理	覆土
5	土師器 甕	16.4			石英・金雲母等を含み、精良	外:ヨコナデ・ハケ後ナデ 内:ヨコナデ・ヨコハケ 一部ナデ	覆土
6	土師器 甕	20.4			石英他の砂粒を含み、精良	ナデ	覆土

第10表 C区SB9出土土器観察表

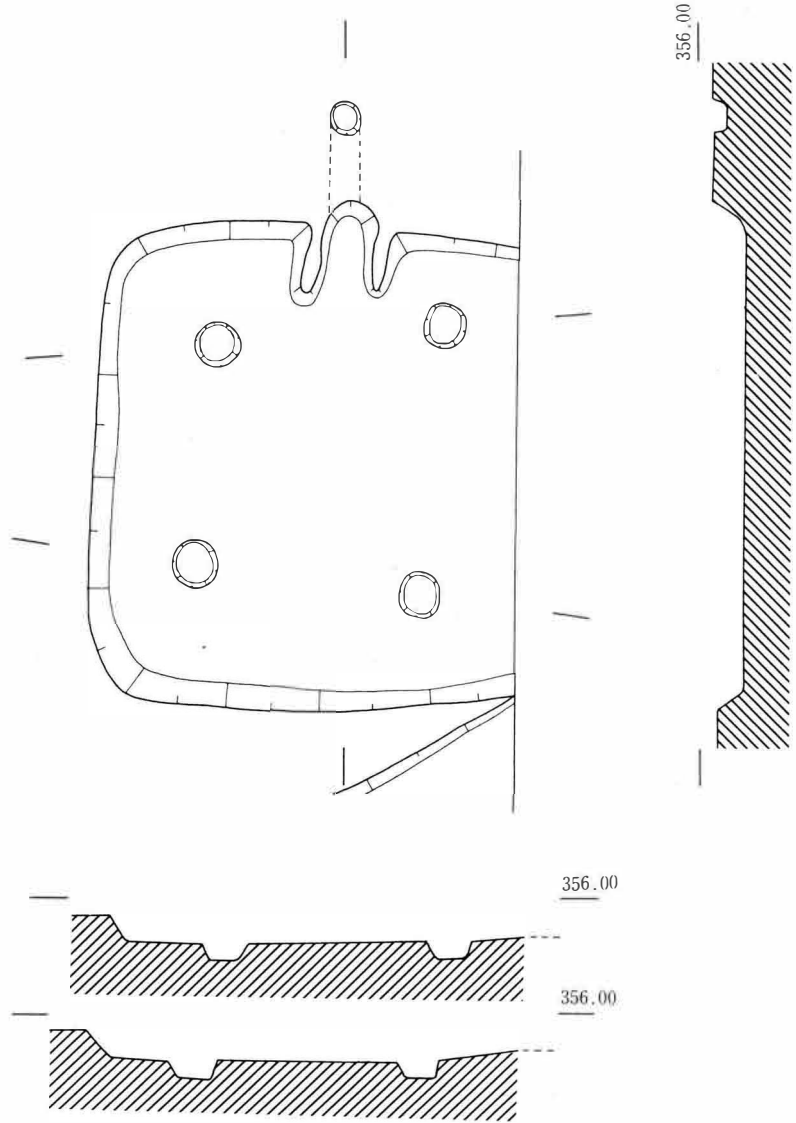
C区11号住居跡

C区西端部にて検出された竪穴住居で、当調査区ではもっとも西側に位置する。さらに西側の部分からは溝跡のみの確認となり、当遺跡居住区域の西端をも示すものとみられる。

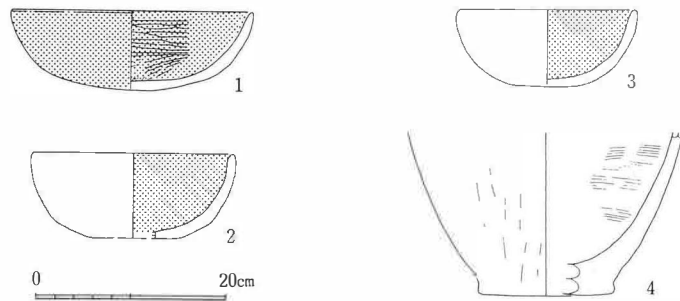
北壁を含む北側の一部が調査区外となるが、ほぼ全体が把握できる。他遺構との重複関係は調査区外で1号溝との切りあいが予測されるが、調査区内ではみられない。

一辺5.2mを測る方形プランの竪穴住居である。確認面からの掘り込み深度は約30cmと浅いが、全体的な残りは良い。床面は中央部を中心に貼床が確認された。柱穴は4カ所認められ、床面での直径が約40cmとすべて均一な大きさである。カマドは西壁に造り付けられており、両袖とも良く残る。ただし、袖内部および火床の焼けは弱いうえ、煙道内への炎の流れも少なく、長期にわたる使用は考えがたい。煙道はカマド内部、北壁中に穿たれた円孔より壁外に緩やかな傾斜を有して約60cm延び、直立する煙だしへと続く。

出土遺物は床面直上から覆土下層を中心に土師器の出土がある。ただし、細片が多く、図化可能な個体は少ない。また、器壁の磨耗が著しいものも多く認められる。



第30図 C区S B11実測図 (1 : 80)



第31図 C区S B11出土土器実測図 (1 : 4)

番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	土師器 杯	12.6		4.2	石英・金雲母他の砂粒を含み、良	ミガキ 外面黒色処理	床～覆土
2	土師器 杯	10.6		[4.5]	石英・金雲母他の砂粒を含み、良	磨耗著しい(ミガキか) 黒色処理	覆土
3	土師器 杯	9.2		4.1	石英・金雲母他の砂粒を含み、良	磨耗著しい(ミガキか) 黒色処理	床面上
4	土師器 甕		7.2		石英他の砂粒を多く含み、やや粗い	外:ケズリ 内:ヨコハケ	覆土

第11表 C区S B11出土土器観察表



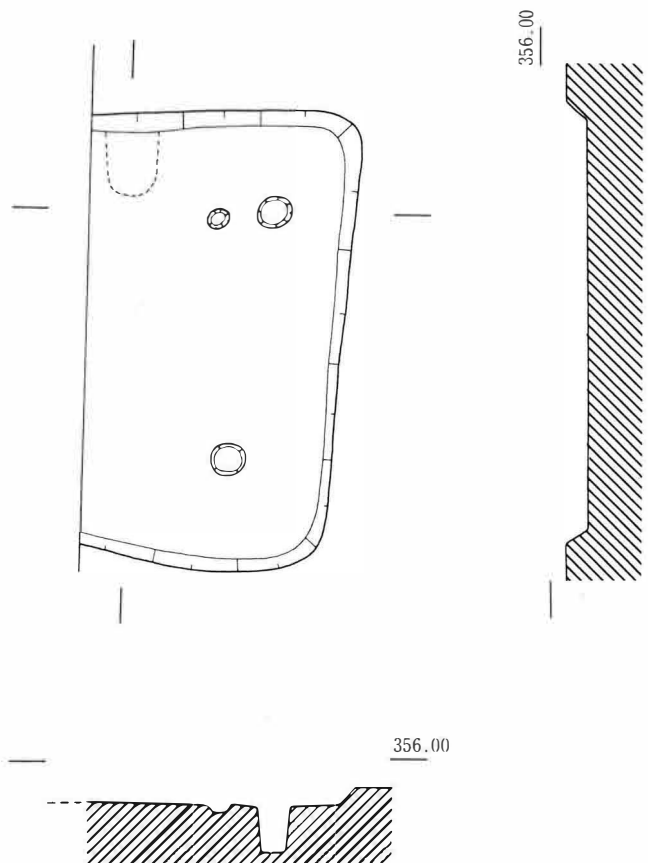
写真14 C区SB11

C区12号住居跡

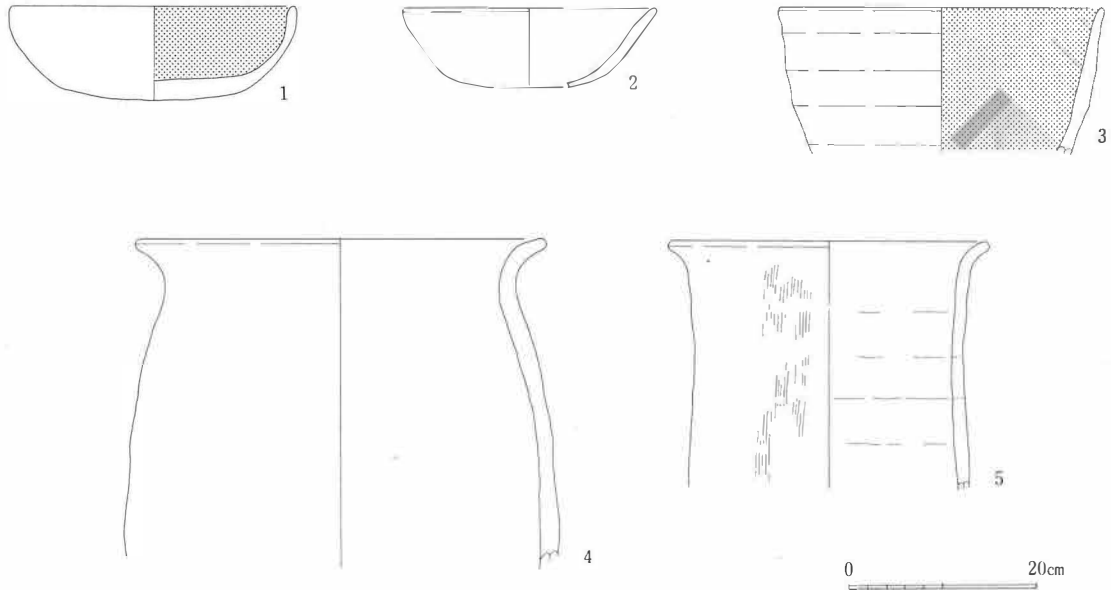
C区11号住居跡の東側で、他に遺構がみられない地点から検出された。南半部が調査区外となる。

一辺4.6mを測る方形プランの竪穴住居である。確認面からの掘り込みは20cmと浅い。床面は礫を含む脆弱な土層であり、明確でないが、カマド火床のレベルならびに土器の出土状況から床として捉えた。貼床ならびに硬化面は確認されていない。柱穴は2カ所確認された。共に直径40cm程を測り、掘削深度は50cm程と他の住居例に比較しても深い。カマドは火床のみが確認されたにすぎず、袖は残存していない。火床部も焼土の焼けや量はそれほど顕著ではない。カマド周辺には被熱石材の小片が認められ、カマド構築にあたっては石材の使用があったものと想定される。煙道は確認されなかった。

出土遺物は床面上を中心に土師器の出土がみられる。図化した個体以外の破片は少なく、土器総量は極めて少ない。3のロクロ杯のみが新しく、他より古墳時代後期の所産と判断される。



第32図 C区SB12実測図(1:80)



第33図 C区S B12出土土器実測図（1：4）

番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	土師器 杯	15		4.9	石英・金雲母粒等を多く含み、やや粗い	外：磨耗（ミガキ？） 内：ミガキ	床面上
2	土師器 杯	13.2			石英・金雲母等の砂粒を含み、良	ミガキ	床面上
3	土師器 鉢	17.2			石英・金雲母等の砂粒を含み、良	ミガキ 内面黒色処理	床直上
4	土師器 甕	21.4			石英・金雲母等の砂粒を含み、良	外：ミガキ 内：ナデ 磨耗著しい	床直上
5	土師器 甕	16.8			石英・金雲母等の砂粒を含み、良	外：ハケ 内：ナデ 磨耗著しい	床直上

第12表 C区S B12出土土器観察表



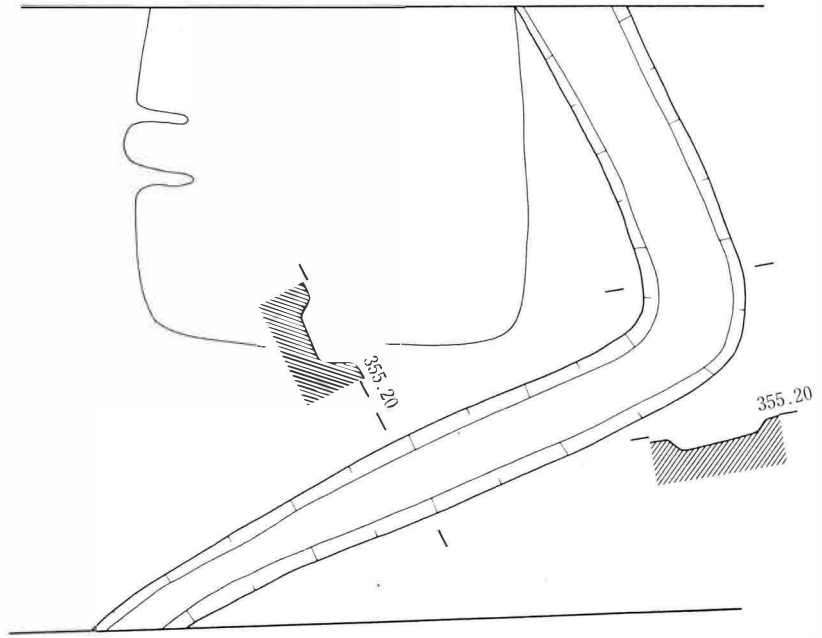
写真15 C区S B12

1号溝跡

11号住居跡を囲むように「L」字形に確認された溝跡である。調査区内では11号住居跡を囲むような形態となっているが、方向からは調査区外で11号住居と重複関係を有するものとみられ、直接の関連性はないと判断される。断面台形を呈するが、確認面からの掘削深度は10cmと浅い。

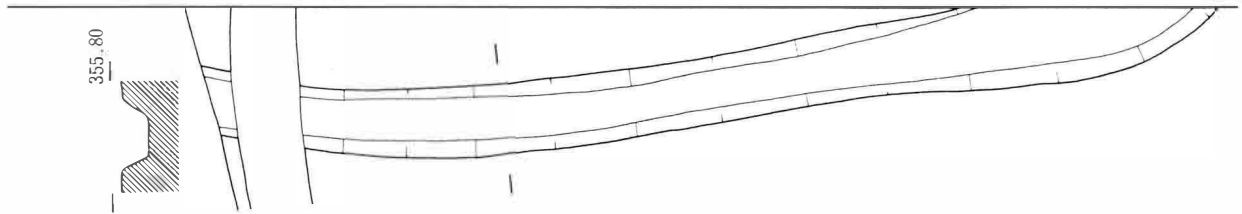
9号溝跡

東西方向に掘削される溝跡であり、西側において12号溝跡およびC区3号住居跡と重複関係を有し、東西ともに調査区外に延びる。断面台形を呈し、掘削深度は約20cmと浅い。

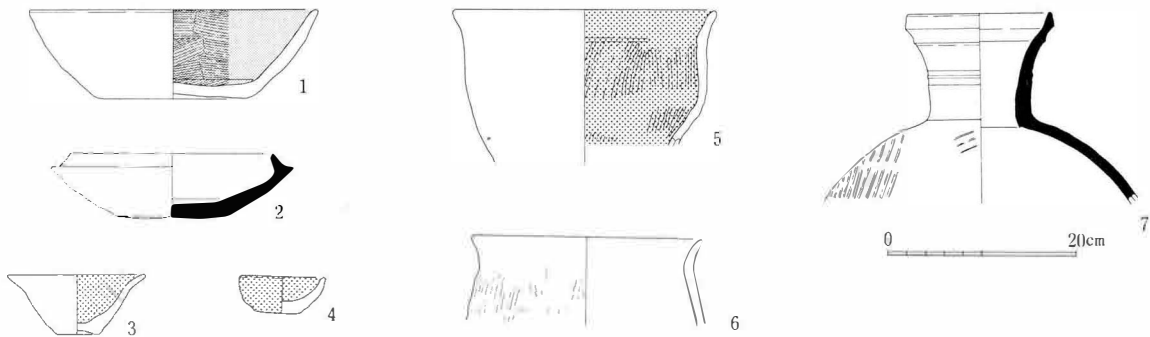


第34図 C区SD1実測図 (1:80)

遺物は須恵器やミニチュアを含む、比較的少量の土器が覆土中より出土している。



第35図 C区SD9実測図 (1:80)



第36図 C区SD1・9出土土器実測図 (1:4)

番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	土師器 杯	15.2	7.4	4.7	砂粒を若干含み、精良	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	SD1 覆土
2	須恵器 杯	11		3.4	白色砂粒を若干含み、良	回転ナデ 内：仕上げナデ	SD9 覆土
3	土師器ミニチュア	7.3	2.3	3.2	砂粒を多量に含み、粗い	ナデ 内面黒色処理	SD9 覆土
4	土師器ミニチュア	4.4	2.2	2	砂粒を多量に含み、粗い	ナデ 内外面黒色処理	SD9 覆土
5	土師器 鉢か	13.7			石英・金雲母他の砂粒を含み、良	外：ナデ 内：ミガキ 黒色処理	SD9 覆土
6	土師器 甕	12			砂粒を多量に含み、粗い	外：ハケ ナデ 内：ナデ	SD9 覆土
7	須恵器 横瓶	7.5			白色砂粒を若干含み、精緻	外：平行タタキ 内：ナデ	SD9 覆土

第13表 C区SD1・9出土土器観察表

2 奈良時代

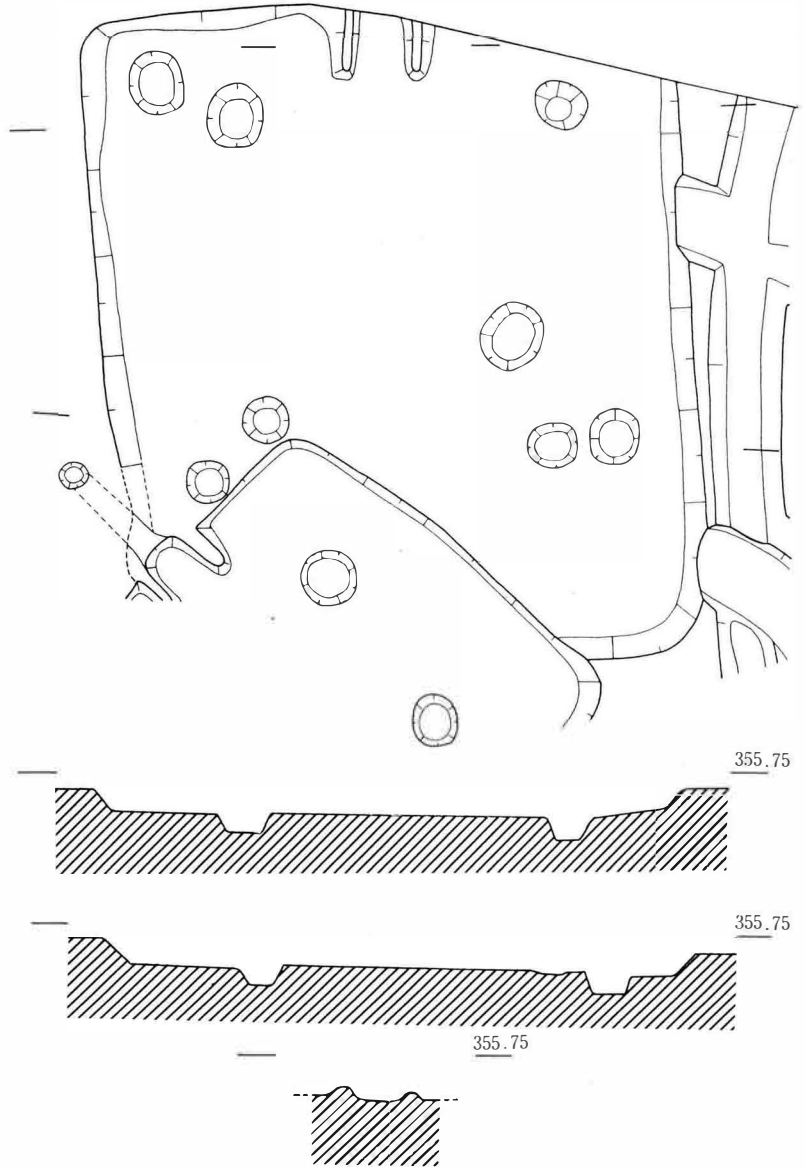
C区3号住居跡

C区住居密集地点にて検出されている。該期に属し、全貌のわかる唯一の竪穴住居跡である。

9号溝跡を掘り込み、8号住居跡ならびに11号溝跡に掘り込まれるという重複関係を有する。ただし、11号溝跡は床面まで達していない。

カマドは北壁にて検出された。焼土がわずかに残存する程度であったが、両袖部が確認された。煙道は調査区外となる。柱穴は4本の主柱が確認され、その他に4箇所ピットが存在している。床面は中央部を中心に明確な貼床が確認された。床は一面である。

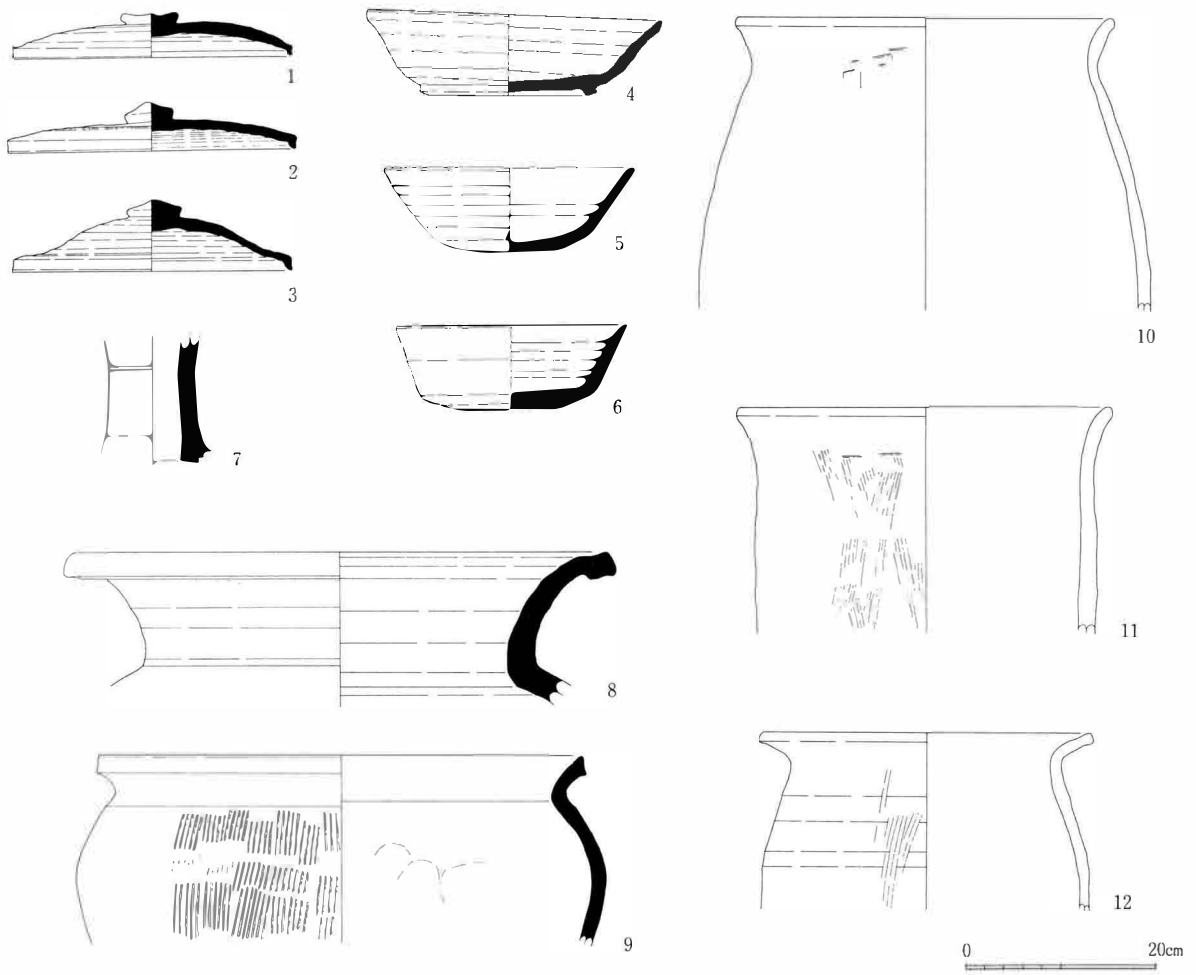
出土遺物は覆土下層を中心に土器の出土がみられる。特にカマド周囲からの出土が比較的多くみられたが、カマド内からは多くない。また、土器組成のうえでは須恵器の比率が高いことが認められる。さらに破片資料も含め、土師器が甕に限定されることは土師器と須恵器の目的別の使い分けが徹底されていたことをうかがわせる。



第37図 C区S B 3実測図 (1 : 80)

番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	須恵器 杯蓋	14.8		2.4	白色砂粒を若干含み、良	回転ケズリ・ナデ	覆土
2	須恵器 杯蓋	15.2		2.6	白色砂粒を若干含み、良	回転ケズリ・ナデ	覆土下層
3	須恵器 杯蓋	14.8		3.9	白色砂粒を若干含み、良	回転ケズリ・ナデ	覆土下層
4	須恵器 高台付杯	15.6	9.5	4.3	白色砂粒を若干含み、良	底部ヘラ切り?後ナデ	覆土
5	須恵器 杯	13.2		4.5	白色砂粒を若干含み、良	底部ヘラ切り→静止ケズリ→ナデ	覆土下層
6	須恵器 杯	12		4.6	白色砂粒を若干含み、良	底部ヘラ切り後ナデ	覆土
7	須恵器 瓶				白色砂粒を若干含み、良	ナデ	覆土
8	須恵器 甕	28.6			白色砂粒を若干含み、良	回転ナデ	覆土
9	須恵器 鉢	25.8			白色砂粒を若干含み、良	タタキ	覆土下層
10	土師器 甕	19.8			石英・金雲母他の砂粒を含み、やや粗い	外・ケズリ 内;ナデ	覆土下層
11	土師器 甕	19.6			石英・金雲母他の砂粒を多く含み、粗い	外;ハケ 内;磨耗(ハケカ)	カマド
12	土師器 甕	17.2			石英・金雲母他の砂粒を含み、やや粗い	外;ヨコナデ・ハケ 内;磨耗	覆土下層

第14表 C区S B 3出土土器観察表



第38图 C区SB3出土土器实测图(1:4)



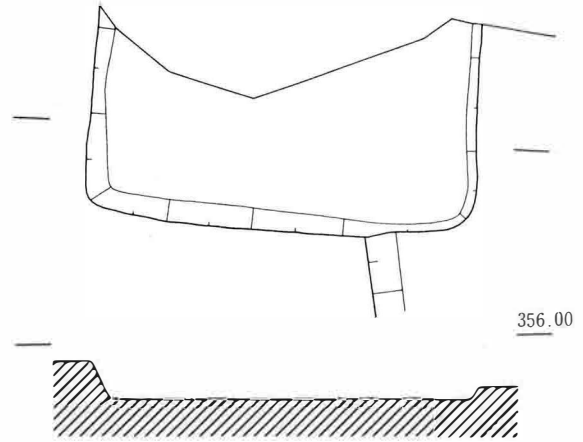
写真16 C区SB3

C区4号住居跡

C区のほぼ中央、壁際で検出された。C区5号住居跡を切って掘り込まれている。北側約半分が調査区外となるが、一辺約4mを測る方形の竪穴住居と考えられる。カマド・柱穴等の施設は確認されていない。覆土は暗褐色粘質土の単一土で、最深40cmの掘り込みを確認した。床面は全体的に脆弱であるが、一部で硬化面を認め、床と判断している。

出土遺物は覆土下層～床面にかけて、土師器・須恵器の破片が少量出土しているにすぎず、図化できたものは須恵器高台付き杯1点である。

須恵器杯は復原口径13.9cm、器高3.1cmを測る。胎土は白色砂粒を多量に含み、粗い。調整は回転ナデ調整である。



第39図 C区SB4実測図(1:80)



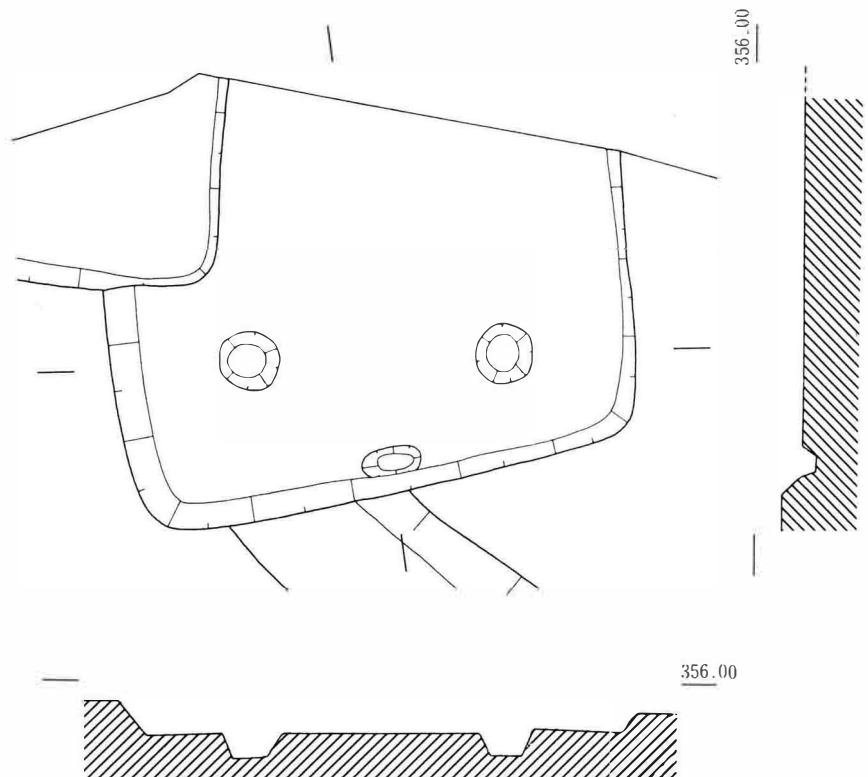
第40図 C区SB4出土土器実測図(1:4)

C区5号住居跡

C区4号住居の東側で検出された竪穴住居である。北側が調査区外となり、北西部を4号住居に切られている。一辺約5mを測る方形の竪穴住居である。床面までの掘り込みは最大35cmを測り、4号住居よりも若干浅い。床面は全体的に堅く締まっていた。カマドは確認されていない。調査区外となる北壁に存在するものと考えられる。柱穴は南側で2カ所確認された。柱の位置からすると、南北に長い長方形プランとなる可能性も考えられる。また、南壁中央部に楕円形のピットが確認されており、出入口施設に伴うピットの可能性が考えられる。

出土遺物には土師器・須恵器片と覆土下層より石製紡錘車1点(第58図43頁)がある。土器は細片ばかりで図化提示できる資料はないが、内外面黒色処理の土師器碗ほかがある。

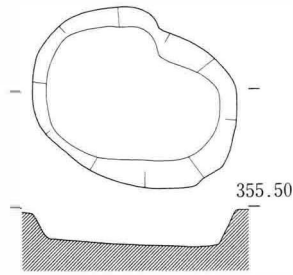
重複関係、ならびに出土遺物の様相からは4号住居を下限とし、古墳時代後期後半代まで遡る可能性が強いと考えられる。



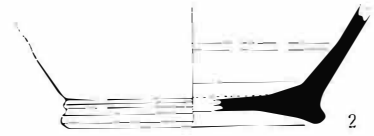
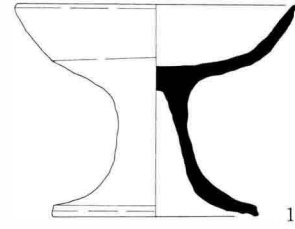
第41図 C区SB5実測図(1:80)

10号土坑

C区東側の小型溝跡群に接して確認されている。1.8m×1.4mを測る不整形の土坑である。土坑内からは拳大の円礫が多量に検出され、円礫上より土器が出土している。礫は土坑底に密着するものから浮いているものまで認められるが、基本的に敷いてある状態で、立体構造は呈していない。礫敷墓の可能性を考慮したが、骨あるいは棺材等は確認されていない。



第42図
C区SK10実測図
(1:80)



0 20cm

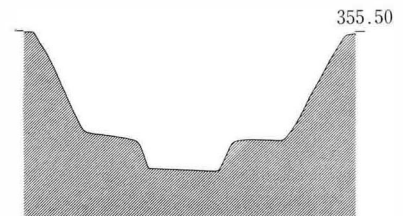
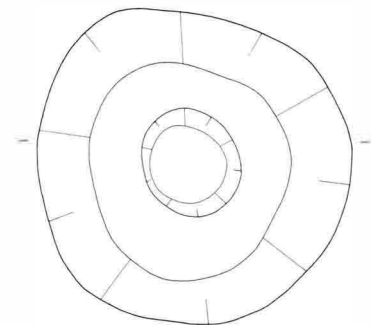
第43図 C区SK10
出土土器実測図(1:4)

14号土坑

7号溝の北側より確認された、直径3.3mを測る円形の大型土坑である。確認面直下より、土坑中央部にて円礫の集石を検出した。円礫は拳大から人頭大のものまで認められ、基本的に重層的な堆積はしていない。また、検出高にも差があり、総じて北側が高い。検出状況よりは、意図的に敷かれたという印象は薄い。礫上より多量の土器が出土している。すべて破片での出土で、接合によって完形に復原できるものはなかった。

礫下は礫を含まない暗褐色系の粘質土が堆積土となり、土器片の出土がみられた。土坑底中央でさらに掘り込みを確認し、二段掘りとなることを確認した。掘削深度は第1段が2m、第2段が約30cmを測る。第2段は直径1.9mを測る円形を呈する。土坑底は明確な底部を検出したが、湧水面まで達しておらず井戸跡とは考えがたい。

礫上と礫下で出土した土器に大きな時間差は見いだされず、集石下の埋没と集石の形成は一連の行為と捉えられる。土坑の性格は明らかにしがたいが、埋め戻しに伴って円礫および土器の投棄が行われたものと考えられる。



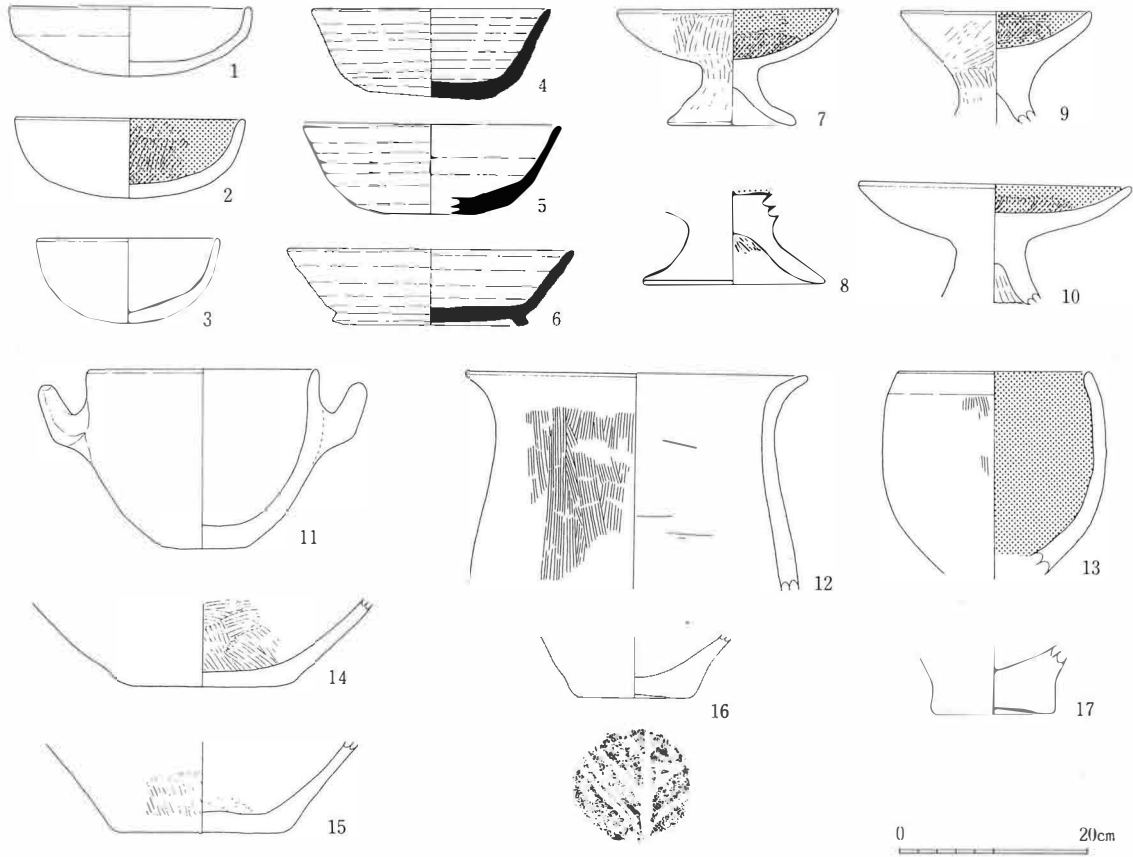
第44図 C区SK14実測図(1:80)



写真17 C区SK10



写真18 C区SK14



第45図 C区SK14出土土器実測図(1:4)

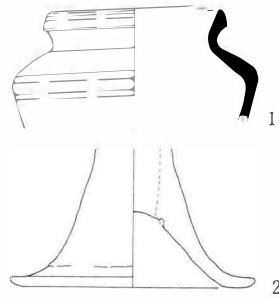
番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	須恵器 高杯	12.8	10.9	11.2	白色砂粒を若干含み、精良	回転ナデ	SK10覆土
2	須恵器 壺		12.9		白色砂粒を多量に含み、粗い	回転ナデ	SK10覆土
1	土師器 杯	12.8		3.7	砂粒を若干含み、良	ミガキ	SK14覆土
2	土師器 杯	12		4.2	砂粒を若干含み、緻密	ミガキ 杯内黒色処理	SK14覆土
3	土師器 杯	9.6		4.5	砂粒を若干含み、良	ミガキ	SK14覆土
4	須恵器 杯	12.6	6.6	4.7	白色砂粒を若干含み、精緻	底部の調整は乱雑	SK14覆土
5	須恵器 杯	13.6	5	4.8	白色砂粒を若干含み、良	回転ナデ 底部ナデ	SK14覆土下層
6	須恵器 高台付杯	15.1	10.4	4	白色砂粒を若干含み、精緻	回転ケズリの後高台貼付	SK14覆土
7	土師器 高杯	11.6	6.6	6.2	砂粒を若干含み、良	ミガキ 杯内黒色処理	SK14覆土
8	土師器 高杯		9.5		砂粒を若干含み、良	外：ミガキか 内：ナデ 黒色処理	SK14覆土下層
9	土師器 高杯	10.2			砂粒を若干含み、良	ミガキ 杯内黒色処理	SK14覆土下層
10	土師器 高杯	14.4			砂粒を若干含み、良	外：ミガキか 内：ミガキ ナデ 杯内黒色処理	SK14覆土
11	土師器 把手付鉢	12	4.6	9.5	砂粒を若干含み、良	磨耗著しく不明(ナデとミガキか)	SK14覆土下層
12	土師器 甕	18			砂粒を若干含み、良	外：タテハケ 内：ナデ	SK14覆土
13	土師器 高杯	10.2			砂粒を若干含み、良	外：ハケ ミガキ 内：ミガキ 黒色処理	SK14覆土
14	土師器 鉢?		8.4		砂粒を若干含み、良	ミガキ (磨耗著しい)	SK14覆土下層
15	土師器 甕		9.2		砂粒を若干含み、良	内外面ともにミガキか	SK14覆土
16	土師器 甕		6.2		砂粒を若干含み、良	ナデか (磨耗著しい) 底部木葉痕	SK14覆土
17	土師器 甕		6.4		砂粒を若干含み、良	ナデ	SK14覆土

第15表 C区SK10・14出土土器観察表

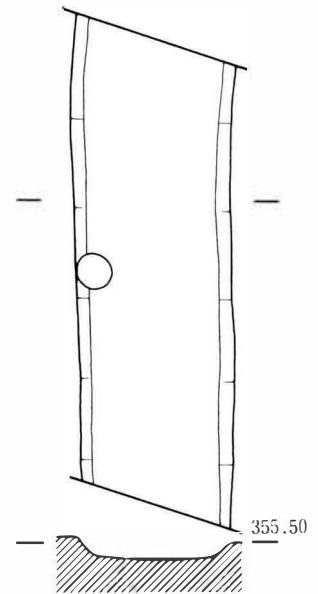
4号溝 C区東端部で調査区を縦断する溝跡である。幅が当調査区内では最大規模で約3mを測るが、掘削深度は確認面から約30cmと浅い。

7号溝 C区東側、小型溝(畝か)が密集する地域に接して検出された溝跡である。断面逆台形を呈し、両端ともに調査区内で確認され、収束している。

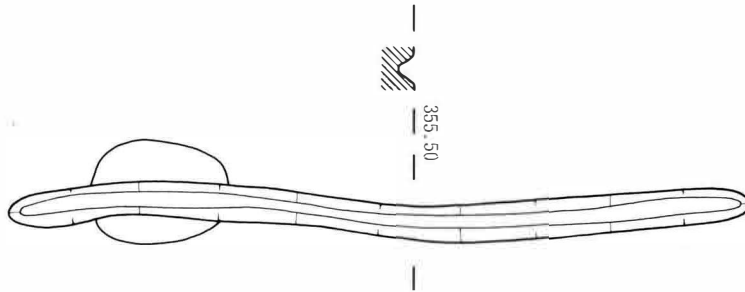
出土遺物は須恵器を主体とした土器群で覆土中より比較的多く出土している。



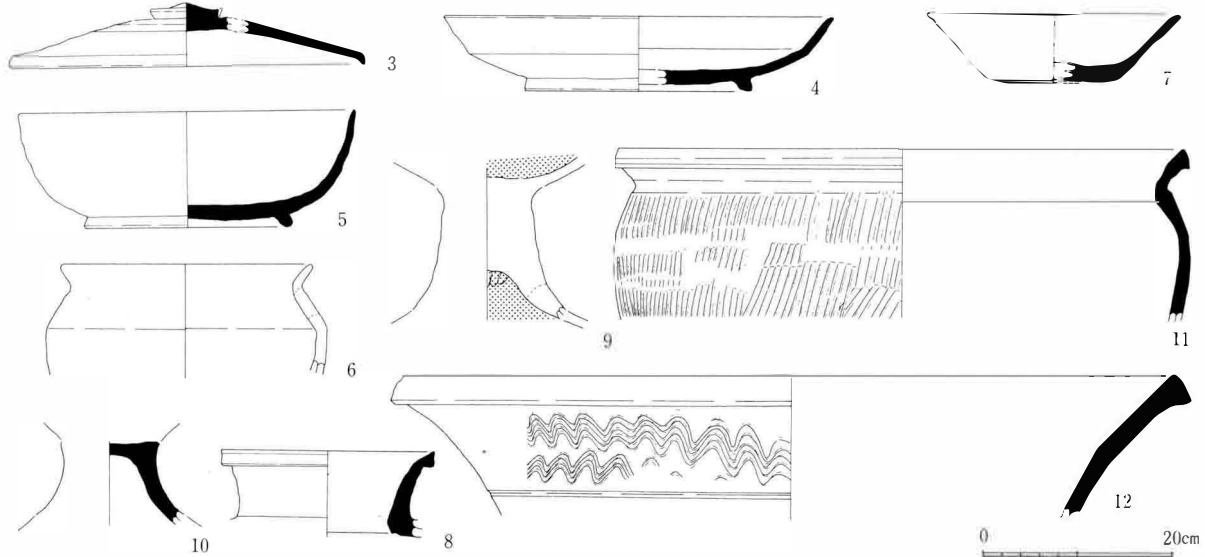
第46図 C区SD4
出土土器実測図(1:4)



第47図 C区SD4
実測図(1:150)



第48図 C区SD7実測図(1:150)



第49図 C区SD7出土土器実測図(1:4)

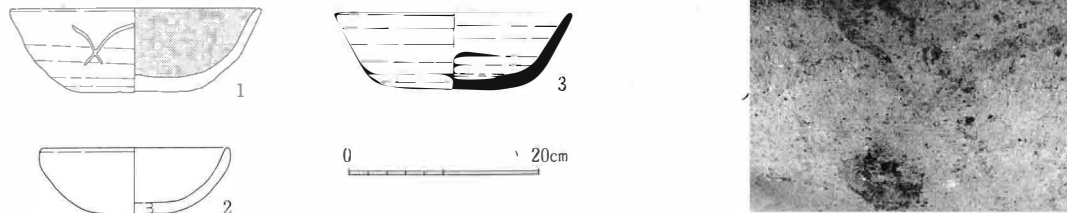
番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	須恵器 短頸壺	9			白色砂粒を多量に含み、粗い	回転ナデ	SD4 覆土
2	土師器 高杯		13		石英・金雲母等砂粒を多量に含み、粗い	ナデ	SD4 覆土
3	須恵器 蓋杯蓋	19		3.4	白色砂粒を多量に含む	回転ナデ	SD7 覆土
4	須恵器 高台付杯	20.4	12	3.9	白色砂粒を多量に含む	回転ナデ	SD7 覆土
5	須恵器 高台付杯	18	11	6.1	白色砂粒を多量に含む	回転ナデ	SD7 覆土
6	土師器 短頸壺	13.4			金雲母等の砂粒を多量に含む	ナデ	SD7 覆土
7	須恵器 杯	13.2	6.4	3.7	白色砂粒を若干含む	回転なで 底部ナデ	SD7 覆土
8	須恵器 横瓶	11.4			白色砂粒を若干含む、精緻	回転ナデ	SD7 覆土
9	土師器 高杯				金雲母等砂粒を多量に含み、粗い	ナデ 杯内・脚内黒色処理	SD7 覆土
10	須恵器 高杯				白色砂粒を多量に含む	回転ナデ	SD7 覆土
11	須恵器 甕	29.8			白色砂粒を多量に含む	平行タタキ	SD7 覆土
12	須恵器 甕	40.6			白色砂粒を多量に含む	回転ナデ	SD7 覆土

第16表 C区SD4・7出土土器観察表

3 平安時代

A区2号住居跡

1号住居跡の南側で、コーナーの一部分が確認されたに過ぎない。当初、土坑の可能性を考えて調査を行ったが、壁際付近で貼床の一部を確認し、住居跡と判断している。柱穴・カマド等の施設の検出はない。覆土は暗褐色粘質土の単一層で、極めて部分的ながら土器片を比較的多く含んでいた。出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯があり、土師器杯の体部外面には「×」状の墨書が認められる。



第50図 A区S B 2出土土器実測図(1:4)

写真19 墨書拡大

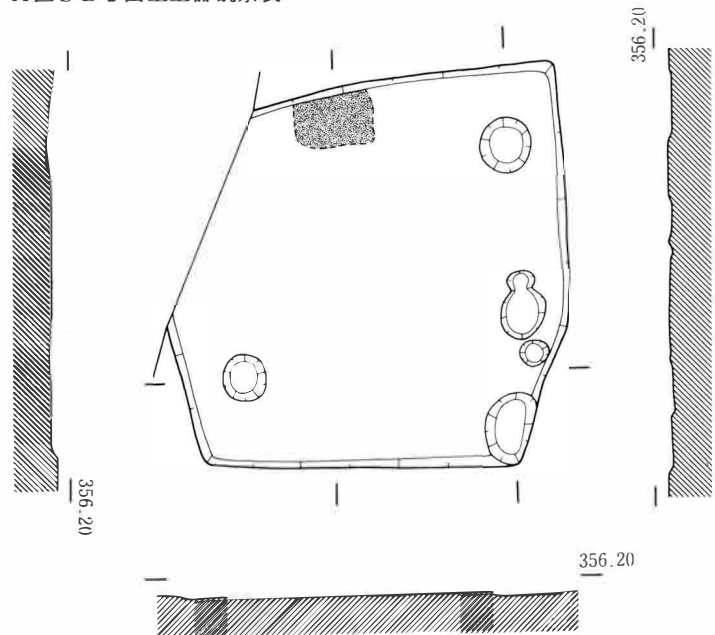
番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	土師器 杯	13.2	6	4.5	石英・白色砂粒等を微量に含み、良	外：ナデ 墨書 内：ミガキ 黒色処理 底：糸切り	覆土
2	土師器 杯	9.8	4	3.5	微砂粒を含み、良	外：ミガキか 内：ミガキ	覆土
3	須恵器 杯	12.4	8	4.1	白色砂粒を多量に含む	回転ナデ 底：へら切り→ナデ	覆土

第17表 A区S B 2出土土器観察表

B区11号住居跡

B区にて検出されており、一辺約4.2mを測る方形の住居跡である。北東側において一部が調査区外となるが、ほぼ全形が確認できる住居跡である。ただし、確認面からの掘り込み深度が10cm未満と極めて浅く、残存状況はよくない。床面は脆弱で、明確な硬化面は存在しない。カマドは北壁に構築されていたとみられるが、袖部すら残っておらず、焼土の存在が確認されたのみである。柱穴は2カ所確認されたにすぎない。

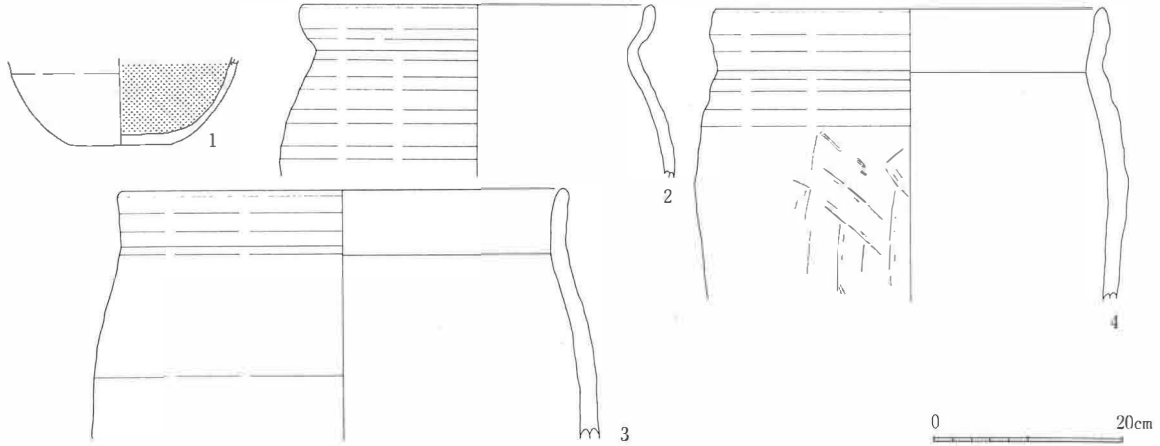
出土遺物には、土師器杯・甕がある。これらの土器群はカマドと想定される焼土周辺から出土している。



第51図 B区S B11実測図(1:80)

番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	土師器 杯		5.4		微砂粒を若干含み、良	内：黒色処理 底：回転糸切り	カマド
2	土師器 甕	18.6			クサリ礫を多量に含む	ロクロ調整	カマド
3	土師器 甕	25.6			石英・白色砂粒ほかを多量に含む	ロクロ調整	カマド
4	土師器 甕	20.6			石英ほかの砂粒を多く含む	外：ケズリ 内：ナデ	カマド

第18表 B区S B11出土土器観察表



第52図 B区S B11出土土器実測図（1：4）

3号溝

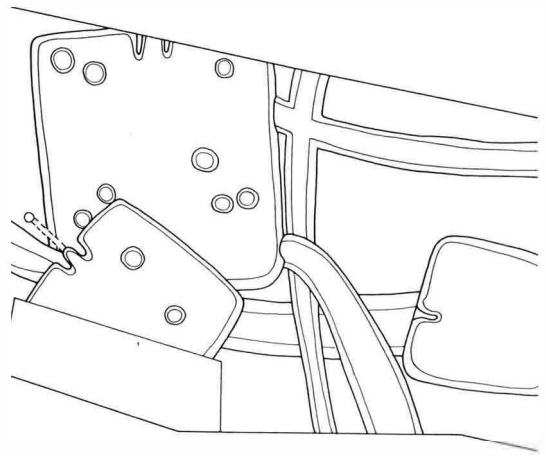
C区西側にて検出された溝である。2号溝を一部掘り込んでいる。断面形態は逆台形で、確認深度は約20cmと浅い。東西両側ともに北へと屈曲して調査区外へと延びる。

出土遺物は覆土中より土師器・須恵器の破片が認められ、図示できたものは須恵器杯1点である。

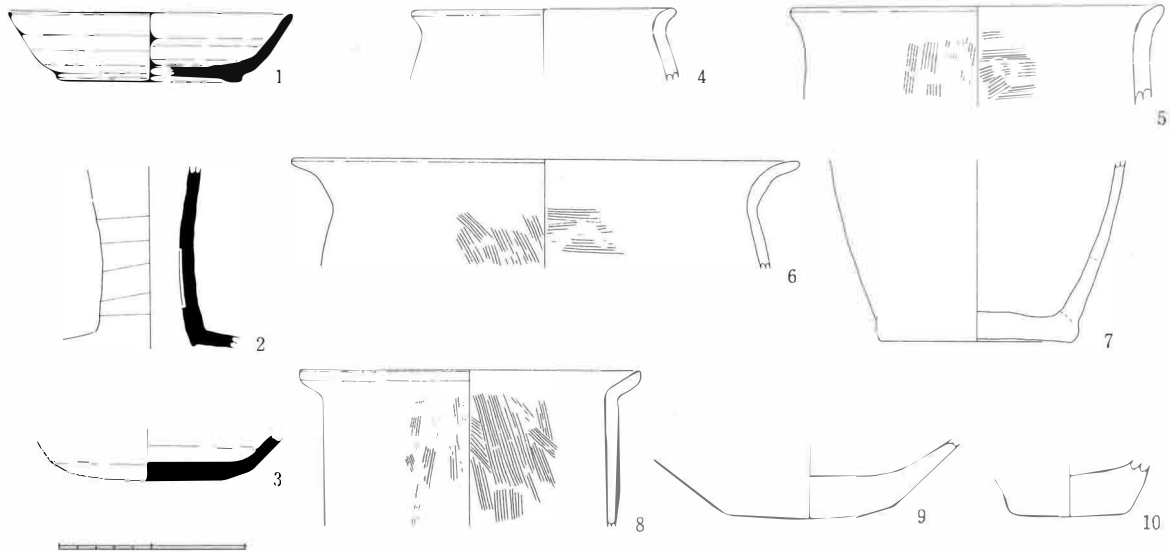
11号溝

C区のほぼ中央部で確認された南北に走る溝跡である。奈良時代の3号住居跡・2号溝・12号溝を掘り込んでいる。断面形態は逆台形で、確認深度は約12cmで、3号住居の床面とほぼ等しい高さとなる。北側の延長方向は3号住居との重複より定かでないが、西側へ緩く屈曲しながらも、北側調査区外へ延びるものと考えられる。

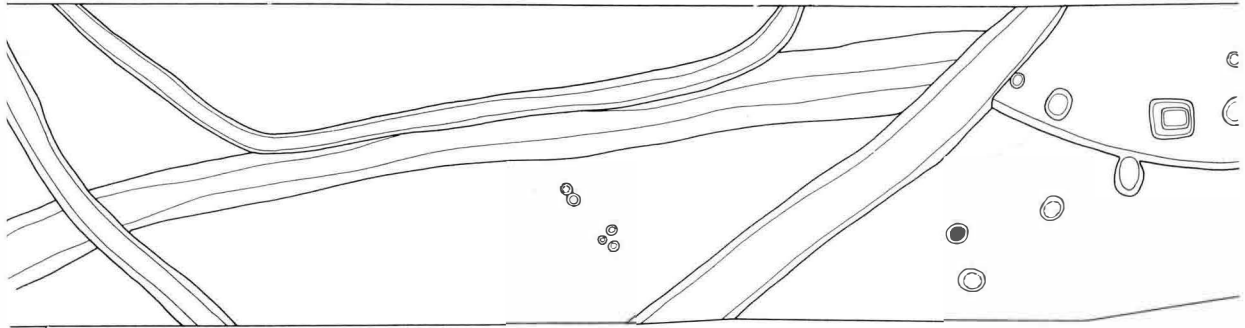
遺物は覆土中より、多量の土師器・須恵器が出土している。



第53図 C区S D11実測図（1：200）



第54図 C区S D 3・11出土土器実測図（1：4）



第55図 C区SD3実測図(1:200)

番号	器種	法量			胎土の特徴	成形・調整・形態の特徴	出土層位
		口径	底径	器高			
1	須恵器 高台付き杯	15	3.7		白色砂粒を多量に含む	回転ナデ	SD3覆土
2	須恵器 瓶				白色砂粒を多量に含む	回転ナデ 内外面自然釉付着	SD11覆土
3	須恵器 杯			8.6	白色砂粒を多量に含む	回転ナデ	SD11覆土
4	土師器 甕	13.8			石英・雲母ほかの砂粒を含み、良	ナデ	SD11覆土
5	土師器 甕	19.4			石英・雲母ほかの砂粒を含む	ハケ	SD11覆土
6	土師器 甕	26.6			石英・雲母ほかの砂粒を含み、良	ハケ	SD11覆土
7	土師器 甕			10.2	石英・白色砂粒ほかの砂粒を多量に含む	外：不明 内：ナデ 底：木葉痕	SD11覆土
8	土師器 甕	18.2			石英・雲母ほかの砂粒を多量に含む	ハケ	SD11覆土
9	土師器 甕				石英・金雲母ほかの砂粒を含む	ミガキカ	SD11覆土
10	土師器 甕			6.2	石英・白色砂粒ほかの砂粒を多量に含む	外：不明 内：ナデ 底：木葉痕	SD11覆土

第19表 C区SD3・11出土土器観察表

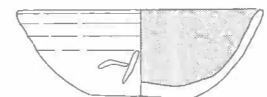
2号溝

C区を東西方向に横断する、溝跡である。途中で南側調査区外へと延び、途切れるが、形態・覆土の状況・出土遺物より同一の溝と判断している。

遺物は覆土中より、土師器・須恵器が少量出土している。図化・掲載できたものは土師器杯1点であるが、外面に墨書が確認できる。

このほか、C区では数多くの溝跡群が確認された。明確な遺物の出土がみられないため、厳密な時期決定はできないが、遺構の配置状況や覆土の状態から該期と判断している。

基本的に東西に走る2号溝に直交する状況で数条の溝跡が確認されている。16号溝や17号溝のように2号溝から分岐するものもみられる一方、2号溝と重複するものもあり、すべてが同一時期に機能していたとは考えがたい。

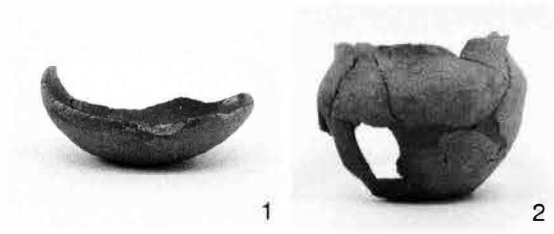


第56図 C区SD2出土土器実測図(1:4)



写真20 C区SD2

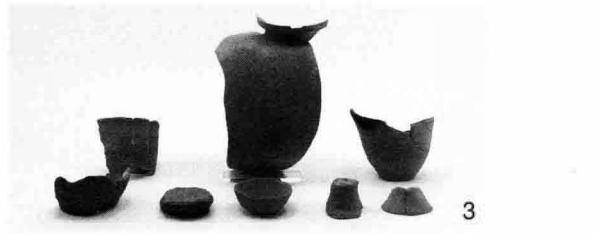
A-SB1



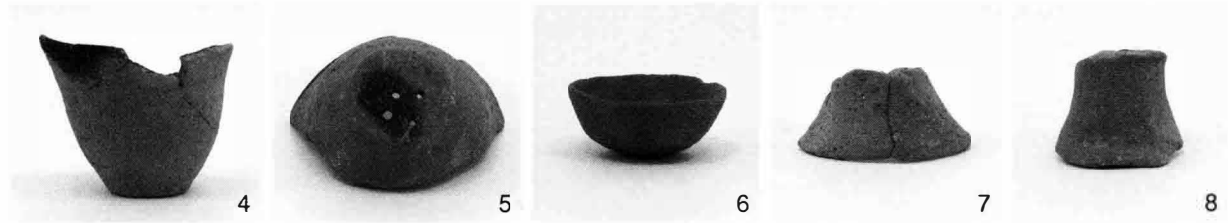
1

2

A-SB3



3



4

5

6

7

8

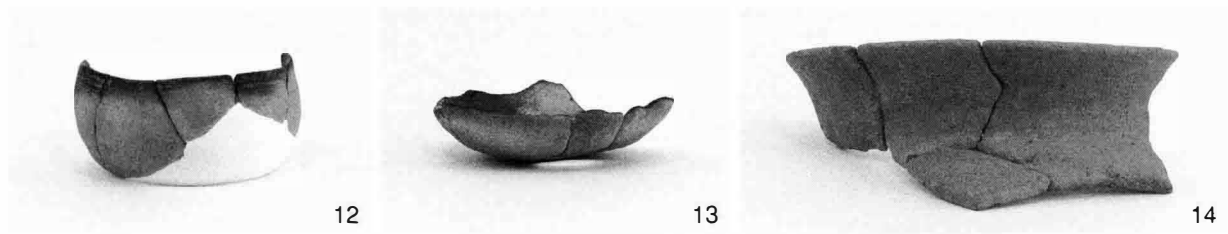
A-SB5



9

10

11

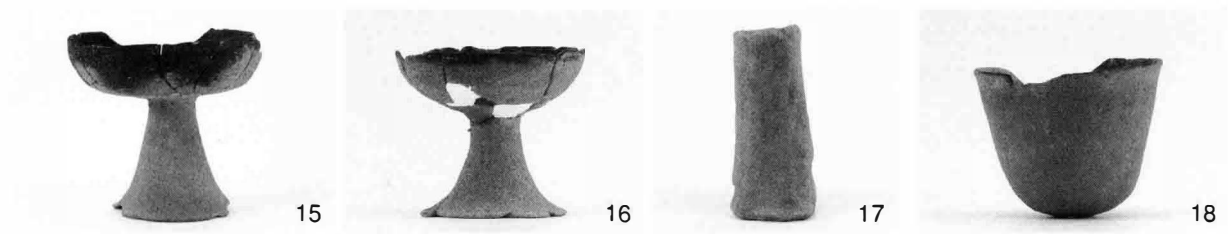


12

13

14

C-SB7

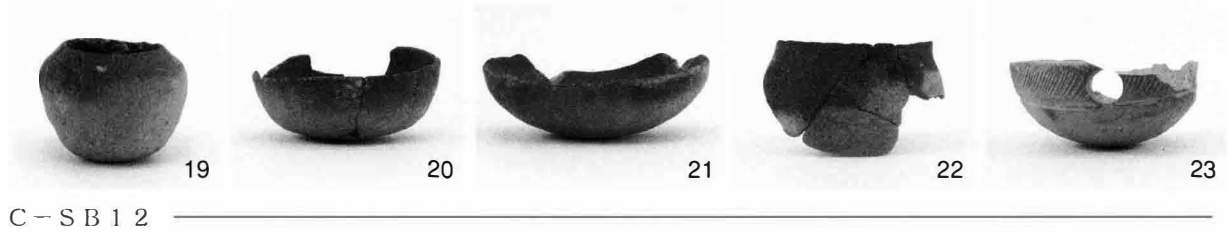


15

16

17

18



19

20

21

22

23

C-SB12



24

25

26

写真21 出土土器①

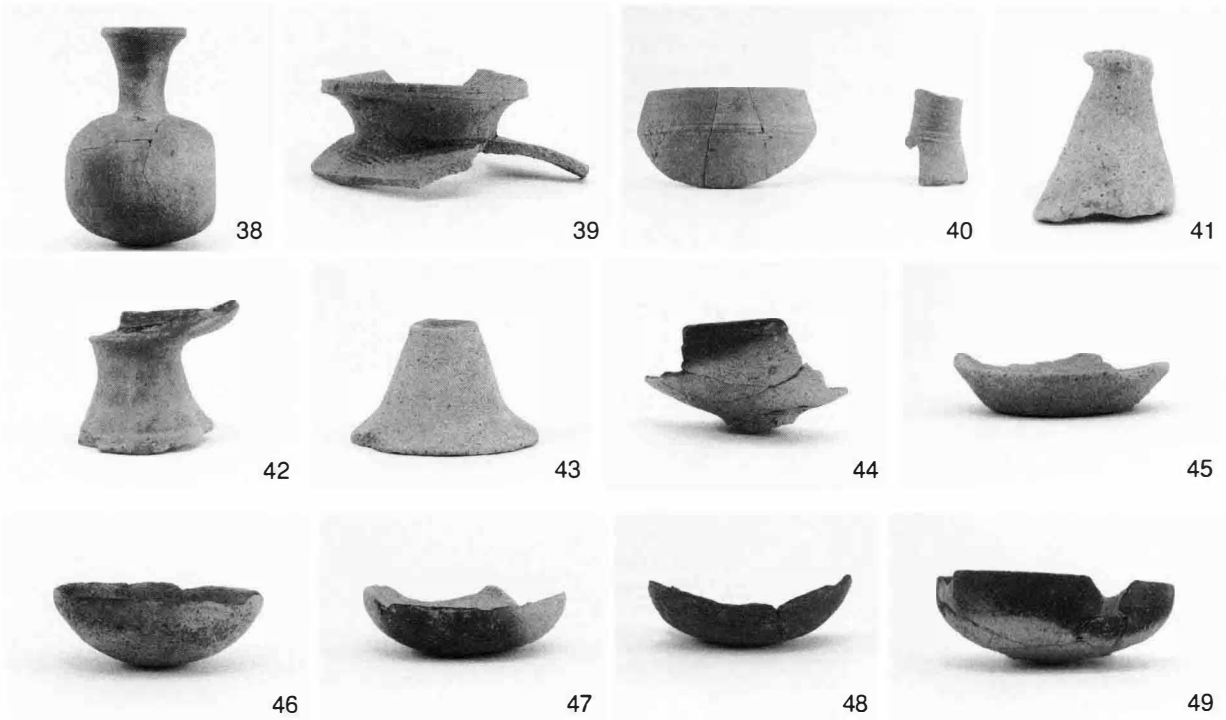
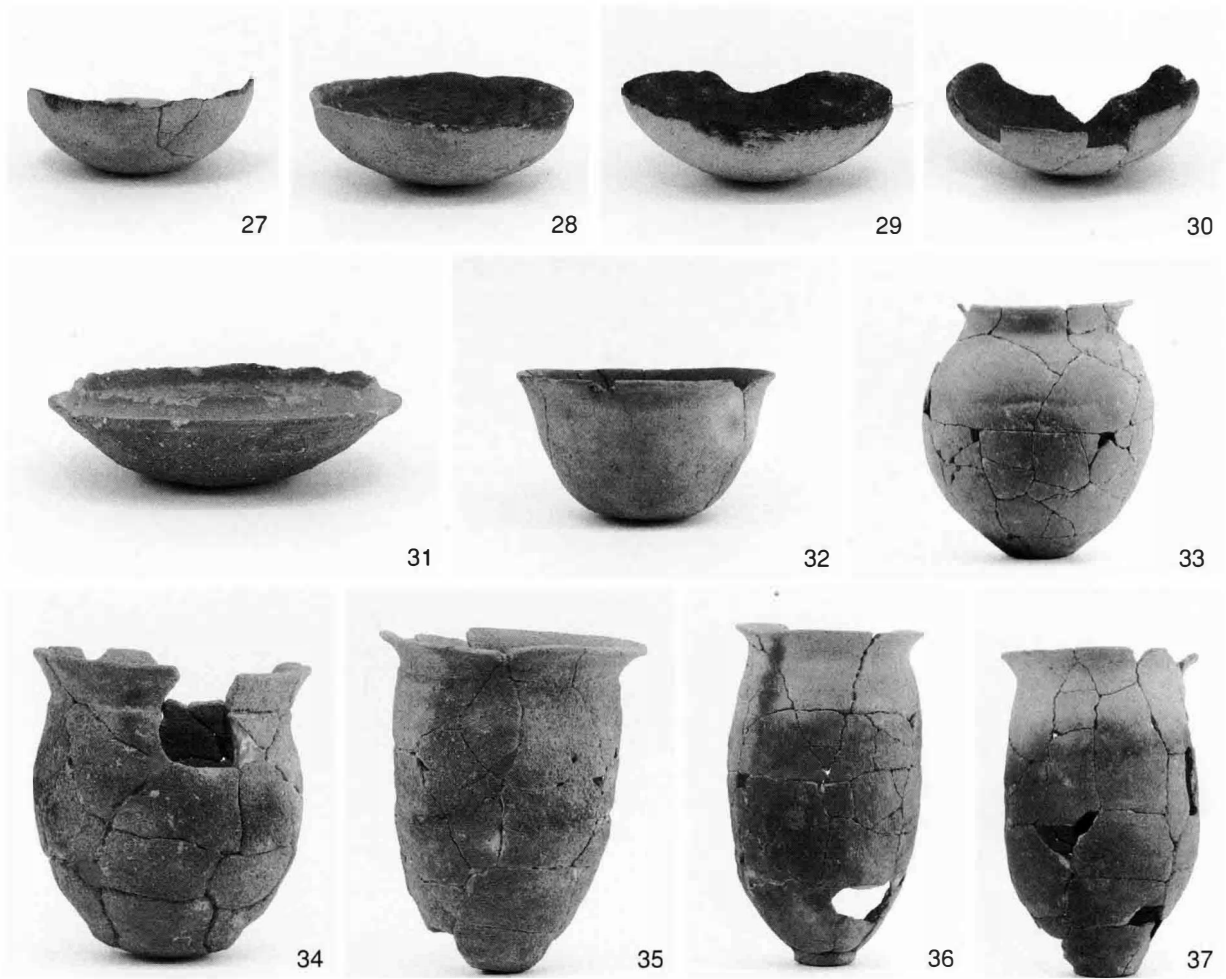
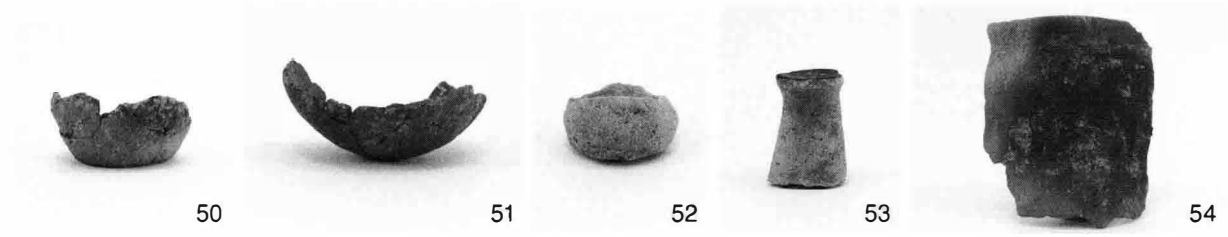


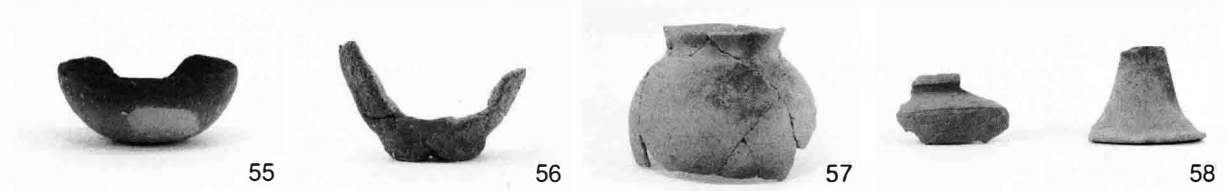
写真22 出土土器②

C-SB9

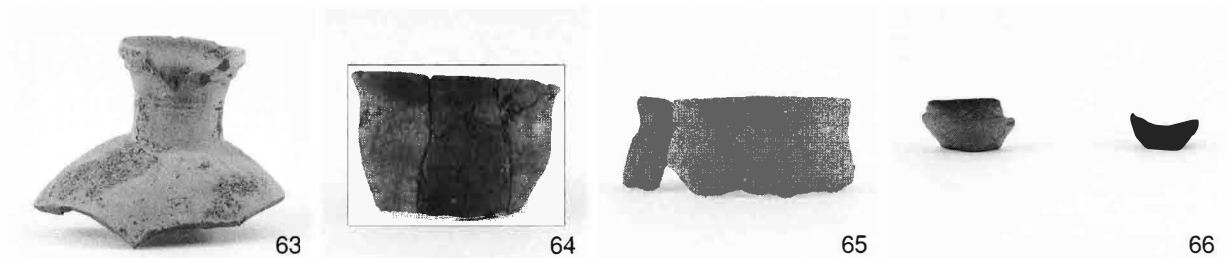
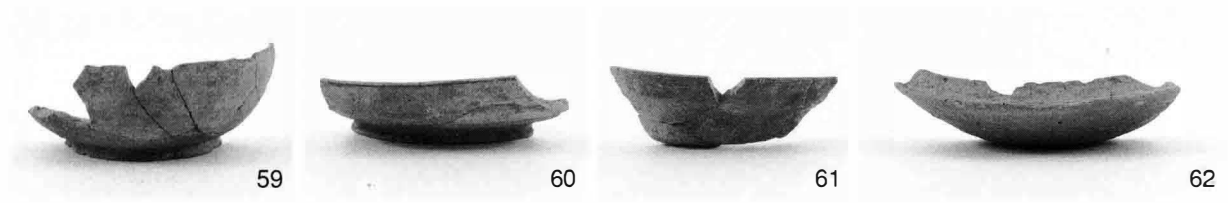


C-SB11

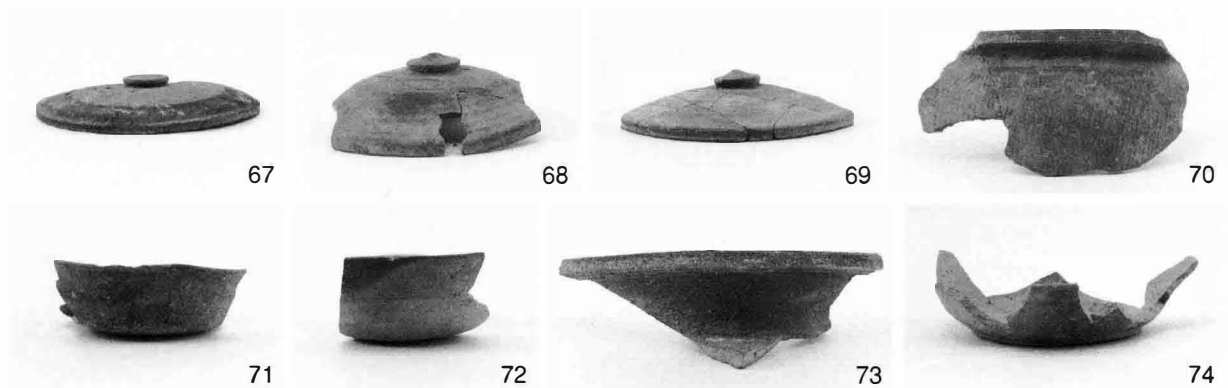
C-SD4



C-SD9



C-SB3

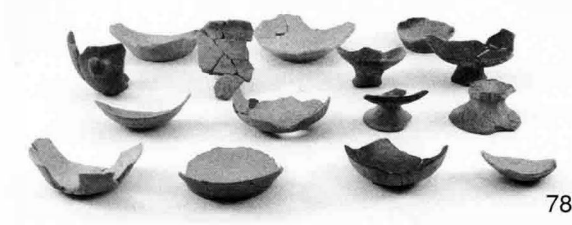


C-SK10



写真23 出土土器③

C-SK14



78



79



80



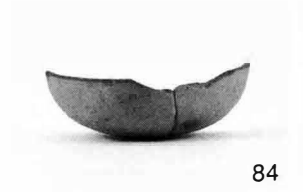
81



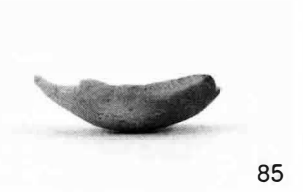
82



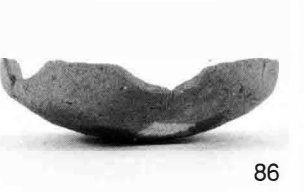
83



84



85



86



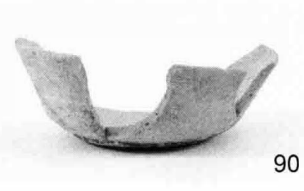
87



88



89



90



91

A-SB2



92



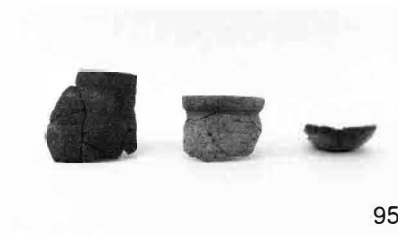
93



94

B-SB11

C-SD11



95



96



97

C-SD1

C-SD2

C-SD3



98



99



100

写真24 出土土器④

4 鉄製品・石製品・金属製品

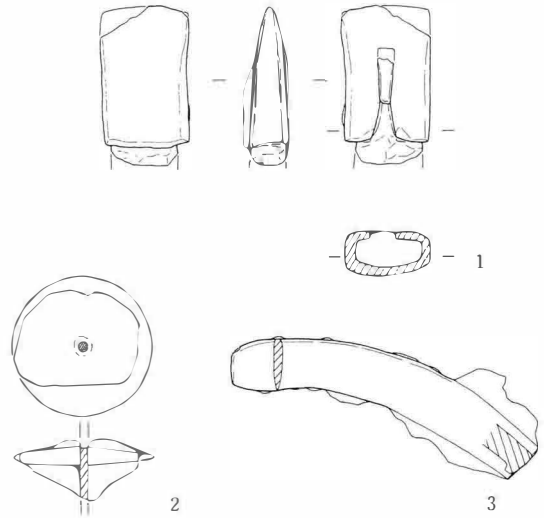
1 鉄製品

鉄斧(1) SK14より1点出土している。刃部のおよそ半分を欠損するが、全体的な残りはよい。長さ5.3cm、刃部推定幅(最大幅)3.6cm、柄部幅3.4cm、厚さ1.2cmをそれぞれ測る。柄部側より緩やかに内湾して刃部にて最大幅を測る。刃部は楔形を呈する。袋部は厚さ0.4cmの鉄板を折り曲げるが、密着はしていない。また、袋部には装着された柄部が固着して残存している。断面方形の木製柄部と考えられるが、錆に覆われ、不明な点が多い。出土遺構より奈良時代の所産と考えられる。

紡錘車(2) C区SB3より1点出土している。側縁部はほとんど欠損し、また、全体的に錆ぶくれが著しい等、残存状況はよくない。中央円孔内には鉄芯が残っている。出土遺構より奈良時代の所産と考えられる。

鉄鎌(3) C区SB8より1点出土している。曲刃鎌で、ほぼ、全体が残っているものと判断される。ほぼ等しい幅であるが、幾分柄部側が広く、最大幅は柄部にあるとみられる。刃部は緩やかに湾曲し、柄部との境は錆によって明瞭ではないが、もともと不明瞭であったと考えられる。柄部には裏面への折り返しが認められるが、錆ぶくれが著しく、明瞭でない。装着された柄部の痕跡(木質等)は観察されない。吉田川西遺跡における分類のII型に該当するか。相伴遺物に乏しいが、出土遺構が奈良時代と考えられるC区3号住居を切って構築されていることから平安時代の所産と考えられる。

このほか、C区SB6より鎌かとみられる鉄片の出土が認められ、古墳時代遺構からの鉄器の出土も確認される。



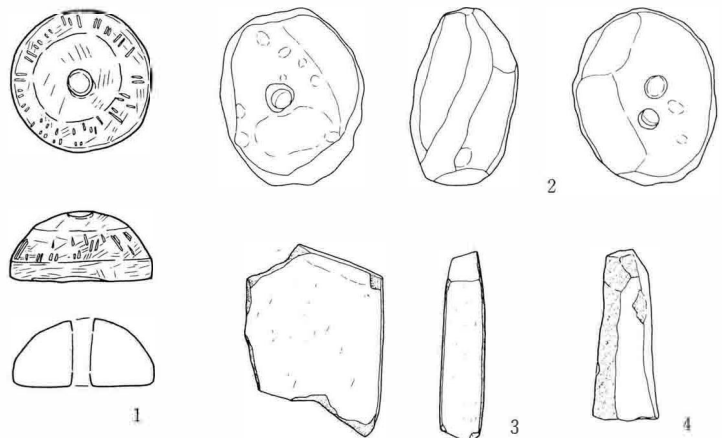
第57図 鉄器実測図(1:3)

2 石製品

紡錘車(1) C区SB5より1点出土している。笠形を呈し、側面には列点状の文様が印刻されている。全体的に擦痕が観察されるが、特に下半部には強い擦痕が残り、側面を意識して製作されたものと考えられる。列点状の文様は整形後、印刻される。相伴遺物に乏しいが、遺構の重複関係より、古墳時代の所産と考えられる。蛇紋岩製。

浮き(2) C区SB3より1点出土している。中央部に円孔が1カ所穿たれている。図右側の面には円孔の上部にもう1カ所円孔がみられるが、貫通はしていない。出土遺構より奈良時代の所産と考えられる。軽石製。

砥石(3・4) C区SB3および検出面より2点出土している。両者ともに欠損し



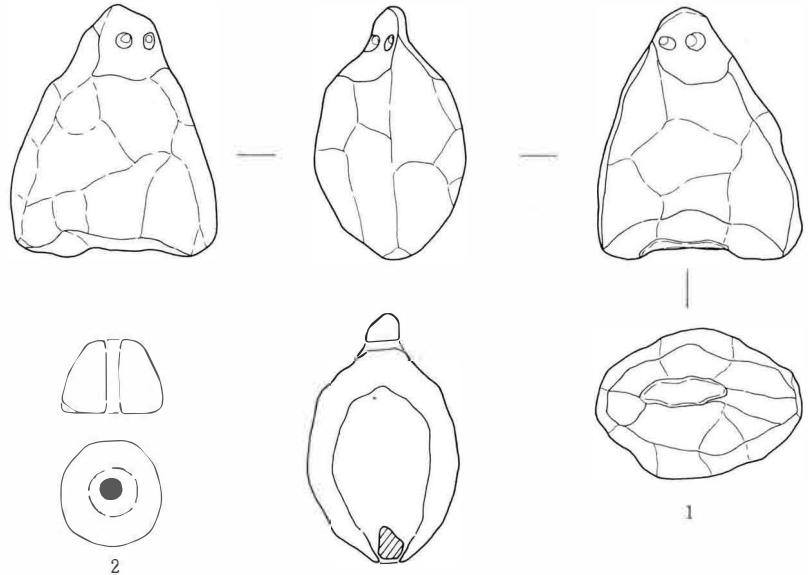
第58図 石製品実測図(1 1:2 2~4 1:3)

ており、全体形は不明である。自然面を利用した砥石であり、浅い擦痕が観察される。形態からは3が置き砥石、4が手持ち砥石の可能性が考えられる。

3 土製品

土鈴(1) C区SB9より1点出土している。完形品である。内部に小石を1点封入し、現在も鈴としての機能を保っている。胎土に石英や金雲母を含む砂粒を多く含み、土師器と同様である。

紡錘車(2) SD5より1点出土している。石製紡錘車と同様に半円球状を呈し、中央部に円孔がある。ナデ調整によって仕上げるが、上下の平坦面は板状工具によって平滑にしている。胎土には石英他の砂粒を多量に含み、土師器と同様である。相伴遺物に乏しいが、出土遺構からは平安時代の所産と考えられる。



第59図 土製品実測図 (1 1:2 2 1:3)

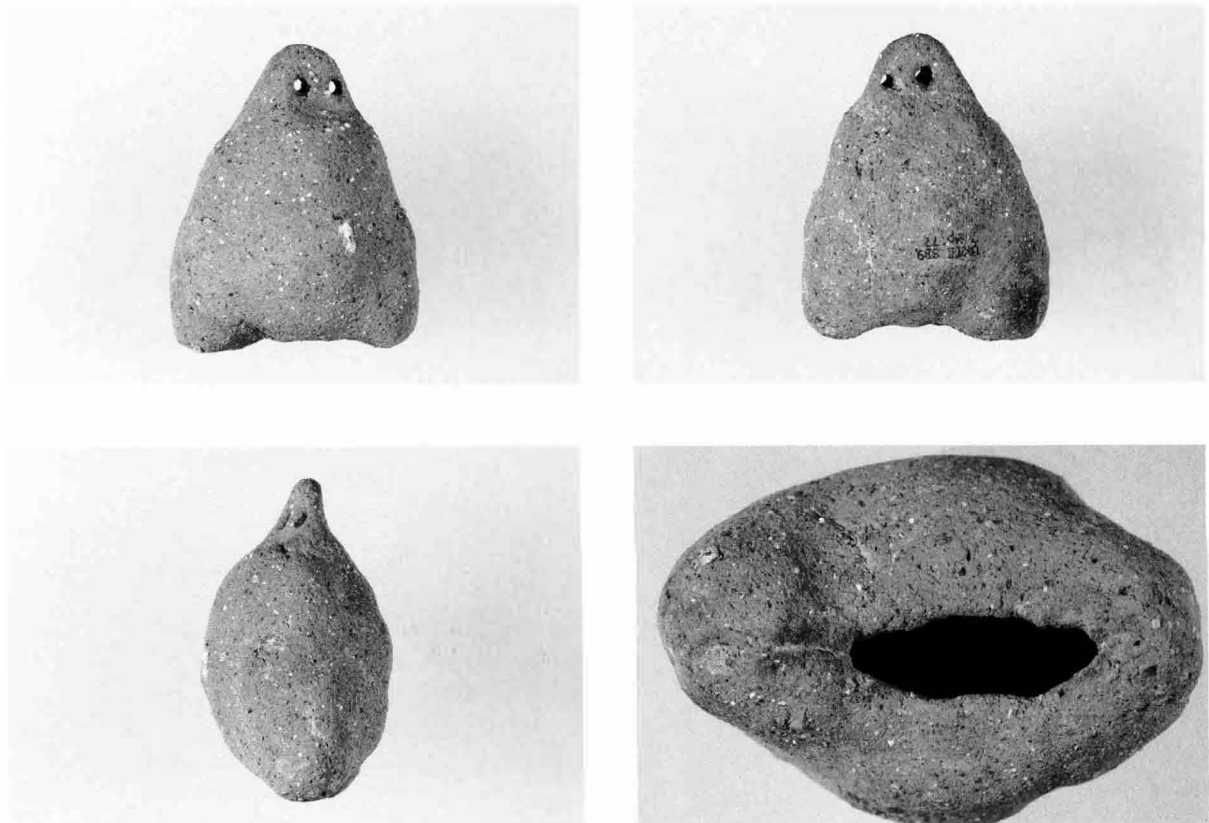


写真25 C区SB9出土土鈴

V ま と め

前節までに報告した上九反遺跡の調査結果の中で、最も特筆すべき成果は、川中島扇状地扇央部における集落遺跡の新発見にあるといえよう。これまでに川中島扇状地では田牧居帰遺跡の調査例こそあれ、田中沖遺跡や橿河原遺跡、南宮遺跡といずれも扇端部に位置しており、扇央部における居住区域の発見は川中島扇状地における人的営みの再考をはかる成果とできる。また、上九反遺跡の主たる存続時期は古墳時代後期に求められ、全国屈指の大群集墳大室古墳群造営母胎集落のひとつとも考えられている田中沖遺跡との関連においても極めて興味深いデータを提供しているといえよう。以下、古墳時代後期を主として若干の点についての理解を提起し、調査のまとめとしたい。

1 古墳時代後期土器群の理解

今回の発掘調査において遺跡の主たる時代は古墳時代後期後半代である。長野市域に限らず、善光寺平において該期は極めて調査事例に希薄な時期であり、当資料の持つ意義も少なからず認められるものと考えられる。今回の調査で該期に含まれる遺構は、11軒の竪穴住居跡（A区1号・A区3号・A区5号・A区7号・C区1号・C区6号・C区7号・C区9号・C区10号・C区11号・C区12号）と2条の溝跡（1号・9号）である。実測図として示した各土器群はほぼ覆土下層～床面出土資料であることから同時性を検証する前提作業を不問に付し、一括遺物として扱う。

まず、すべての住居跡に認められる器種に杯がある。小稿ではこの杯類を主として取り上げていくこととする。基本的にどの資料も底部が丸底で、直線的に開く口縁部形態を呈する。内外面共にミガキ調整を施し、黒色処理をしている。一部、体部外面に須恵器模倣杯の系譜を引くと考えられる稜線が認められるものもあるが、総じて形態化しており、時期的に大きく遡らないことを示している。これらより、笹沢浩による長野県内の広域編年の古墳時代V期の資料と限定されよう¹⁾。これまでの研究成果を参照すると、杯の変化の方向性は口縁部が強く外反し、内面が比較的深い形態から浅い半球状の形態へ、さらに皿状へと変化していくことが明らかとなっている。須恵器の出現に伴って杯蓋を真似た模倣杯が新たな形態として加わり様相を複雑にしているが、この模倣杯も原型である須恵器の形態から大きく乖離し、他の杯類と同じ方向性で変化していくものと捉えうる。

さて、ここで土器群の分別をはかるにあたり、後期後半において新たに出現が指摘される、体部内面下半と底部との境に明瞭な屈強部を有する平底を指向した杯（西山分類I類以下、I類杯と呼称する）に注目しよう²⁾。このI類杯はC区1号住居・C区10号住居・1号溝出土土器群にその典型例が認められる。これらの遺構の同時性を検証することは難しいが、C区10号住居跡出土須恵器杯身において、一定点を示すことは許されるものと思われる。一方、A区5号住居跡出土杯類は口径が比較的小型で深く、該期の主体を占める半球状形態の杯の一種とみられるが、平底を指向しており、また、内面ミガキによって体部と底部の境に明瞭な稜線を生み出すなど、このI類杯の成立に関わりを持つものと考えられる。共伴須恵器甕は二期（II型式）のうちに収まるものと考えられ、前記の典型的I類杯よりも先行するものと考えられる。

同様に新たな形態の出現をみると、C区6号住居跡における小型平底の皿状形態を呈する杯が指摘できる。この杯類は形態がこれまでにはみられないものであるばかりでなく、黒色処理が施されておらず、それ以前の杯類とは異なる意図で製作された可能性が指摘できる。この杯類を含まないA区5号住居・A区7号住居・C区1号住居・C区3号住居・C区10号住居・C区11号住居等では杯・高杯（杯部）・鉢といった小型供膳具には必ず黒色処理が施される土器群で構成され、これが約束事として貫徹されている状況が窺われる。それに対して、共伴

する須恵器からより新しい時期に位置づけられるC区6号住居では、それ以前からの系譜と考えられる杯が黒色処理されるのに対して、この平底杯は黒色処理が施されずに存在する。これを黒色処理の衰退や形骸化とみることもできようが、意図的に黒色処理を施さない杯、つまり別の用途を期待され製作された器であるとみるほうがより実体に則していると考えられる。共伴する須恵器の量が他の土器群ではみられないほど豊富であることも関連が予測され、須恵器保有量の増大が土器群の器種構成に変化を引き起こした可能性すら指摘できる³⁾。

一方、前代（後期前半）の杯からの変化という点からすれば、模倣杯に注意を払わなくてはならない。A区7号住居跡およびC区7号住居跡出土土器群の中に模倣杯が独自の変化を遂げたとみられる、外面に弱い稜線を有し、体部外面をヘラケズリ調整を行う杯が存在する。この模倣系譜の杯はヘラケズリを省略したC区10号住居出土杯に変化するものと考えられ、共伴須恵器からも先行する可能性を指摘しておく。

以上より、I類杯および平底の皿状杯の出現により前後二分し、さらに5号住居跡の土器群はI類杯成立に関わるものとした。また、模倣杯によりA区7号およびC区7号住居出土土器群もI類杯に先行するものとの理解を示した。しかし、この理解は様式理解に裏打ちされたものではなく、杯類の系統差による前後関係の把握にすぎず、土器群全体の中から一部の杯類を前後に分離しうる可能性を指摘したに止まる。さらに、模倣杯による前後関係の理解は同一段階の細部変化である可能性が考慮され、より多くの資料による検証が必要であることはいうまでもない。また、A区3号住居およびC区11号住居出土土器群にみられる小型杯の存在やC区9号住居や9号溝出土ミニチュア土器の存在によってさらに器種構成の変化の予測を行う余地は残されていると思われるが、無意味に屋上屋を重ねることは慎み、古墳時代後期土器群理解への一経過を示すことで出土土器群把握の責を果たすこととしたい⁴⁾。

註

- 1) 笹沢 浩 1988「II 4(2)古墳時代の土器」『長野県史』考古資料編 全一卷(4)遺構・遺物
- 2) 花岡弘・西山克己 1995「信州の6世紀・7世紀の土器様相—現時点での概略として—」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 3) 共伴する須恵器の器種に瓶類が多いことは器種構成の変化を想定するうえで注意される。ただし、当遺跡から出土した須恵器全体に占める瓶類の割合が多いことを念頭におくと、当遺跡に居住した人々の須恵器に期待した効果や用途を示唆するものと考えられよう。
- 4) 西山編年に対応させると、本遺跡出土土器群は善光寺平後期5期にあたり、先行するとしたものが3～4期に該当するものと思われる。

2 C区9号住居出土土鈴について

C区9号住居覆土中より、鐸形を呈する土鈴が1点出土している。破損部分はなく、完形品である。また、内部にある土玉によって、現在も振ると音を発し、鈴としての機能を十分に果たす優品である。高さ6.7cm、幅5.4cm、厚さ3.9cmをそれぞれ測る。

つまみ状に平たく整形された頭部（鈕）には円孔が2孔穿たれている。しかしながら、この孔に紐を通して吊り下げた際に生じる擦痕等は観察されず、吊り下げでの使用はないものと判断される。

底部はスリット状に開口し（口部）、中空構造で内部に小石が1点入っている。口部は端部までは開いておらず、両端部が封鎖されている。ここで、口部の成形を観察すると、口両端部には粘土が被さって閉じられていることが観察される。これは製作にあたって、当初は端部まで開口した状態で成形され、後に閉じられたものと理解することができる。また、この閉じられた部分は両方ともに外側に開く形態となっており、粘土を足して形を整える際に閉じられたものとみられる。全体形は指頭押圧によって整えられ、最終的にナデ調整によって仕上げられている。胎土は石英や金雲母粒等の砂粒を多量に含む等、土器の胎土と同様である。焼成はやや不良で、表面の

細粉化が著しい。色調は橙色を呈し、この点も土器群と同様である。

善光寺平における古墳時代の土鈴は、長野市本村東沖遺跡において2例、長野市牟礼バイパスB地点遺跡において1点の出土がみられる¹⁾。本村東沖遺跡の2例は各々形態を異にし、1点は鉄垂鈴形、もう1点は鼓形を呈する。これら2例は口部が存在せず、完全に覆われ、内部に複数の小石を入れている。牟礼バイパスB地点例は球形で現在の鈴形を呈し、口部が存在する。ただし、口部は後で切り込まれたうえ、他に付属する鈴であり、当遺跡出土の土鈴とは指向する形状が大きく異なる。これは音色を発する鈴としての機能の点でこそ共通するが、モデルとなる金属製の鈴は異なっていると考えられる。類似例3点が中期後半代、当遺跡出土品が後期後半代と時代の違いが反映しているよう。

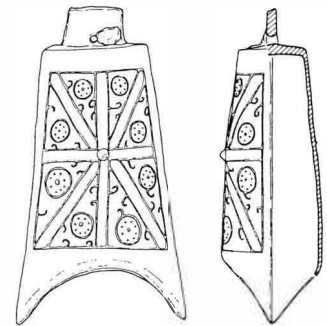
土鈴は縄文時代に中部高地を中心として存在することが指摘されているが、弥生時代において断絶し、縄文以来の伝統的な系譜を考えることは難しい。また、古墳時代中期に現れる金属製の鈴についても円形を基調としており²⁾、当例のような鐸形のものとは認められない。さらに、古墳時代土鈴からも先に記したように系譜が求められないことは明らかであり、同時代の他の器物に系譜を求めることが最も妥当と考えられよう。

形態を再度確認すると、

- 1 鐸形を呈する
- 2 明瞭な鉋部を有し、円孔が穿たれる
- 3 底部にスリット状の口を有する
- 4 口部の両脇が角状に外側に張り出すよう成形されている

という諸点が特徴として掲げられるが、これらの条件を満たす同時代の製品では「馬鐸」がもっとも類似していることが想起される。

長野県は馬具の出土数が全国的にみても卓越し、静岡県とともに一大集中地となっている。しかしながら、現在までに馬鐸の出土例は少なく、飯田市塚原5号墳のもの³⁾が図として提示されている程度である⁴⁾。その後の集成⁵⁾においても見あたらず、残念ながら同一地域内からの出土品との比較は困難である。ここでは便宜的に塚原5号墳例を取り上げると、鉋に円孔を有する点や口部の両端が翼状に広がる点で同一の形態をみることができる。大きさや体部の文様において著しい違いが指摘できるが、ここでは形態の類似性が確認できればよい。他地域であるが、小型・無文の馬鐸は大きさの点等においてさらに類似することがわかり、当例が馬鐸を指向したものの、つまり、系譜が小型・無文の馬鐸に求められることが示しうる。そして集落の場所や位置からは後述するように大室古墳群との関連性が指摘される田中沖遺跡との有機的繋がりが予想され、馬鐸との接点はその辺りに求めることが可能であろう。



第60図 塚原5号墳出土馬鐸実測図(1:4)

註

- 1) 千野浩ほか 1993『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』長野市教育委員会
- 青木和明ほか 1986『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスB・C・D・地点—』長野市教育委員会
- 3) 田中 裕 1992「初期の鈴について」『史跡 森將軍塚古墳』更埴市教育委員会
- 4) 松尾 昌彦 1988「III 4 (3)馬具」『長野県史』全一卷四遺構・遺物
- 5) 塩入 秀敏 1994「長野県の馬具副葬古墳について」『長野県考古学会誌』74

3 集落の展開と周辺遺跡との相関関係

前節までに報告したように、竪穴住居は古墳時代11軒、奈良時代1軒、平安時代2軒となり、ムラとして把握されるのは古墳時代後期のみであることがわかる。

古墳時代竪穴住居群は10軒以上におよぶが、出土土器からは長期におよぶ集落というよりは短期間に形成されたムラの姿とみることができる。切り合いが少なく、個々の住居が一定の間隔をおいて位置するというような背景があつてのことであろう。また、前代の遺構や遺物の存在も認められず、人的活動が該期より開始されたことも明らかである。古墳時代後期に至って開発の手が延びた地域と認識できよう。

古墳時代後期には、調査対象地全面に遺構の分布を確認することができる。A・B両地区で確認した沓瀬原以南にほとんど切り合い関係を有さずに点在して分布している。遺構間には多くの場合、一定の空閑地が存在し、群馬県黒峰遺跡や中筋遺跡の事例を参照にするならば、屋敷地が広がっていた可能性が考えられるが、関連遺構（柵等）は見出されていない。

奈良時代遺構群はC区中央付近に固まっており、調査区内で大きく展開する様相はみられない。隣接する田牧居帰遺跡¹⁾においても、溝（土坑）跡1条が確認されているにすぎず、現段階で該期集落の展開を予測することは難しい。

平安時代は溝群がその主体を占めるものとみられるが、近接して位置する田牧居帰遺跡に集落の存在が認められ、当地点における平安時代遺構の展開は田牧居帰遺跡に主体があつたことが理解される。多数の溝跡のあり方は当地点における該期遺構の状況と類似し、同一集落の可能性すら想起される。広義に捉えた場合、当地点の平安時代遺構群は田牧居帰遺跡の西端を示しているということもできよう。

周辺遺跡との関連性であるが、奈良・平安時代には隣接する田牧居帰遺跡において遺構の存在が認められ、瓦塔や陶硯を含む遺物の出土があるなど、特に平安時代においては仏教関連等、一般庶民の生活域とは様相を異にした点が指摘されている。前記したように、奈良・平安時代は田牧居帰遺跡との関連性を無視することはできず、同一遺跡の範囲にあるものと考えておきたい。

一方、人的活動が初めて見られる古墳時代後期は、川中島扇状地端部に位置する田中沖遺跡との相互関係が想定される。田中沖遺跡はこれまでに3次に及ぶ調査が実施されている²⁾が、古墳時代中期後半代以降集落形成が活発化する。調査成果が報告されている1次・2次調査では60軒におよぶ竪穴住居が確認され、切り合いも激しく、極めて密集度の高い集落遺跡として注意される。

集落の存続期間は当遺跡に比して長いものと考えられるが、多くの遺構が認められるピークは当遺跡と重なるものとみられる。そして、田中沖遺跡が位置する微高地は狭長な形態とみられ、居住域の拡大は近在する別の微高地への移動が余儀なくされた可能性を考えあわせると、拠点集落における集落域拡大の結果が当遺跡形成の背景として想起されよう。ここには拠点集落と周囲に形成される小規模集落といった関係性が考えられ、一連の遺跡群としての把握が可能となろう。さらに、こうした事象は古墳時代後期後半代における群集墳の爆発的な築造とも対応するとみられ、大室古墳群をはじめとする後期群集墳との関連性も見えてこよう³⁾。こうした点に関して、田中沖遺跡をも包括した遺構展開の分析が必要と考えられるが、3次調査が継続中の現在、早急な結論は控え、見通しをもって調査のまとめとしたい。

註

1) 矢口忠良 1993『田牧居帰遺跡』長野市教育委員会

2) 矢口忠良 1980・1991『田中沖遺跡』・『田中沖遺跡II』長野市教育委員会

長野市埋蔵文化財センター 1995・1996「田中沖遺跡」『所報』No.6 No.7

3) 大室古墳群を築造した集団の居住地はこれまで明らかになっていない。千曲川の旧流路を考慮すると、古墳群周辺に想定される居住域は極めて狭い。すると、千曲川対岸の川中島扇状地が候補地の一つとなり、田中沖遺跡の調査成果は重要となる。ただし、500基を越える古墳群の形成には、単一の集落のみが関わったとは考えられず、複数の集落、集団の存在が予想される。

長野市の埋蔵文化財第85集

かみ く たん
上 九 反 遺 跡

平成9年3月20日 印刷

平成9年3月28日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 埋蔵文化財センター

印刷 信毎書籍印刷株式会社